みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

土方久功日記Ⅱ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土方, 久功 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001015

土方久功日記　第10冊
1926年7月7日～12月16日（大正15年）

解　説

いつもと同じような毎日でありながら，この第10冊では，久功自身，あるいは彼の周辺で，いくつかの小さな事件が起きている。

前年には，二科展にも，院展にも出品しないと言っていた久功であったが，この年，院展に4点の彫刻作品を搬入した（8月31日）。久功としては，それなりの勝算があってのことであろう。しかし，見事落選。せめてもの慰めは，作品を引き取りに行った時の，院展の掛りの爺さんの言ったことである。

これとこれとはほんとに惜しい事でしたよ，もう少しで入る処でしたよ。随分問題になって居たのですがね。

兄・久俊と結婚して間もない文子が，流産の恐れがあり，8月25日に赤十字病院に入院した。しかし，治療の甲斐もなく，9月7日，流産してしまった。その日の日記に，久功は，次のように書いている。

朝から曇って不愉快で，不愉快で，不愉快で，不愉快で。朝，兄が病院に行ったのに，午後ニハ電報でショリデキヌスグキテクレ。英子サンが行く。そして夜，死児が家に運ばれる。さて私は何をでも聞くのさへいやだから，九時にさっさと床に入って寝てしまったのだから，私は何も知らないのだ。もう沢山聞かないで居たって，みんな知ってゐるのだから。だが聞き度い人は，外の喋り度がって居る人にでもきいてくれ。だが夜になって，英子サンがアルコールを四本買ってきて，向ふの室で皆で何か，何かして居た事だけは諸君，話しではなくて本当のことだ。そして，久顕サンは苦い顔して玉突に出てしまって，夜中の十二時過ぎまで帰っては来なかったといふのも，本当のことだ。そして此の何日の間，殊に私が不愉快で，不愉快で，不愉快で，不愉快な日を送って居て，私は手のかぶれをのぞいても，神経衰弱，不快症，怠惰性貧眠症等々を新たに持って居るだらう。自分の事ったら，何一つしやしない。

久功が，いかに苦しんでいたかがわかろうというものである。

11月6日からの日記に，過去の回想が多数記されている。その一つを取り上げてみよう。

○きみ江さんと私とは短い間のいいお友達でした
夏の夜を月があっても無くてもキャナルへ行っては足をなげ出しました
きみ江さんは九州に帰って多分嫁いだでせう，多分いいお母さんになったでせう

1926年の夏，久功は，「笹塚」に家を借り，ひと月ほどそこで過ごした。そのころ，長崎から上京し，「笹塚」にあった水村家に寄寓していたのが，君江であった。たったひと夏であったが，楽しい思い出であった。しかし，ほろ苦くもあった。

久功は，翌年1927年の2月に，丸善画廊で個展を開くが，この頃その準備を着々と進めていた。11月25日の日記には，一風変わった，『個人展覧会の為の前口上』が記されている。長いものであるが，初めの部分を引用する。

私は彫刻家になるつもりで美術学校に入ったのですが，美術学校を卒業する前に，彫刻の大家になって取りすますような気は毛頭無くなって了ったのです。それから後は，惰性でぐづ〳〵して居るうちに，美術学校を卒業してしまったのですが，今になっても，美術学校は私に何を教へてくれたのか，何うもしっくりしないのです。いいや，多分色々な技術を教へてくれたのでせう。兎も角も，何も出来なかった私が，何かかにかこしらへるようになったのですから。

それにしても私が今造って居るようなものは，何も五年間も美術学校に通はなくても，誰にでも出来るようなものです。全く私は大変な遠道を歩いたものです。いいや，この五年間が私に所謂玄人芸術を嫌ひにさせたのだと思へば，譬へ其の間が余りに長過ぎたにしても，自らの迂闊さを笑ふ外，腹もたちません。私は素人の余技が好きです。尤も所謂素人でも，解ったような玄人ぶった素人は，玄人より鼻持ちがなりませんがね。何故だか，一寸お話しします。

まあ，帝展に出て居る人達は代表的な玄人でせう。処が皆さん，帝展に行ってごらんなさい。其処にあなた方は何を見ますか？　其処にあるのは，デッサンの正確，刀の冴え，仕上げの丁寧，技巧，技巧，技巧，外面，外面，外面です。素人の造るものは，そこへゆくとがさつで，きたならしいです。にも拘らず，素人の人の作品には，なか〳〵面白いものがあります。何故でせう。私はそれを其の製作動機に帰し度いと思ふのです。これらは全然余技ですから，始めから楽な気持で誰憚る所なく（或は知らない故に）勝手なことをやらかします。

ですが，その勝手さが結〔局〕極自己に忠実である所以なのです。人様の前に取りすましたり，取りつくろったりしない無邪気さが，其処にあるのです。

ここには，「玄人芸術」（＝帝展）への嫌悪，反アカデミズムの姿勢が見え，また，「素人の余技」への評価があらわされている。これは，原始美術へのあこがれへと結びつく。ドイツ表現主義の影響が明らかで，それが久功を南洋へと旅立たせた，ひとつの大きな要因と考えられる（久功が表現主義の影響を受けたことに関しては，拙稿「土方久功の造形思考――その表現主義的性向をめぐって」，『世田谷美術館紀要』第3号，本巻に再録，を参照されたい）。

［10　千九百二十六年七月七日ヨリ〔表紙〕　仝年十二月十六日迄
　　大正15年　　HISAKATSU. H.］

七月

七日

朝のうち曇ったりして居たが，夕方迄には立派に晴れて，夕方は殊に気持がいい。築地に出かける。二度目の創作物上演で，人が沢山入って居る。出物は，武者小路氏の「愛欲」[86]と小山内氏の「奈落」[87]。

「愛欲」 説明，説明，説明といふ感じ。それは内容量に対して，場面が乱費されると云ふような。一体，旧白樺派の人々は何か，「苦悩と宥し」といふようなものを信仰して居るかに，私に思はれる。で，それらの人々はその信仰を熱愛し，苦悩し，苦悩し，苦悩の中に宥すことを，喜びの中の深い喜びと思惟し，努力し，或は享楽さへして居るかに，私には思はれる。けれども又それらの人々は，その信仰に対してはなか〳〵ねばり強く，意志強く，多かれ少なかれ，英雄的な人々の集まりである。それらの人々が愛するのは，自己に対する英雄であり，それらの人々の自負する所は，認められざる天才である。けれども又，それらの人々の本当に偉い所は，それらに対する惜みなき熱と努力である。

それらの人々が慰むる所は性善説であり――彼等はにっちもさっちもならないで悪いことをするが，皆善人なのである――それ故にそれらの人々の間では，罪と悪とは殆ど神秘的にさへ思はれる人生，運命が負担すべきものなのである。

で，先づざっと此の位ひにして，野中英次は天才で，みじめで，人生と運命とに極度に虐げられて，遂に人殺しをする善人なのである。小野寺某は，自分の幸福な置位〔ママ〕はあまり気にしないで，別段の関係もなさそうな野中英次を友なるが故に，否信仰の為に――何故なら，野中英次は天才だからである――最後まで益々捨てない，世にも稀な同情家であり，英雄なのである。私が斯ういふと，それは皮肉に聞えるかも知れないが，それは全くその筈で，私は皮肉を云って居るのである。何故なら，友達の不幸を悲しむのは，私達には普通のことであり，まして親しい友達が人殺しでもすれば，それは益々気の毒な次第だからである。そして私達の間では，そんな時，許すの許さないのなんて云ふことは，まるで問題としても取扱はないだらうからである。

で，私に云はせれば，此の芝居には色がない，綾がない，姿がない。だから私は，これは説明だといふのだ。少し突飛な所に飛んで，譬へばピランデロの「みんな尤だ」（各人各説）を見ると，土台にはなんにもない。始めから何にもない。そうして終ひまで行っても，遂に何にもないように見せて居る。（処が其処にこそ私達は，思ひ思ひに何物かを見るのだが）そのくせしょっぱなから，色とりどり綾しげく，そうして人生の或る

姿がその中に盛り込まれて居る。「愛欲」では，始めから何かをめざして居る。それが私に信じられないとか，無関係だとかは別として，作者の信仰が露骨だから，私もその何者かを認めることとする。認めても感心はしない。そうすると，色が欲しくなる，綾が望ましくなる。処がそれは無い。だがここには一つお化がある。お化はなか〳〵いいもので，私は恐がりのくせに，なかなか好きだ。私が此の芝居を終ひまで見たのは，第一に作を読んで居なかったから，知らないものに対する興味と，知って置く為の努力だったが，第二には，お化が出たからである。私はお化だけを理屈ぬきにして面白く見たのだ。出来ることなら，二場か三場位ひにして，此のお化だけを見せてもらひたいものだ。第一幕第三場，第三幕の殺し場，それから第四幕の塔の一室をまとめて「人殺」とでも題して見せてほしいものだ。そうしたら，英次を通して，ある姿が小さいながらはっきりするだらう。

小山内氏の「奈落」は，これに反して軽い好ましい一幕物だ。ここでは富サン，八サンのせりふは，それは顕微鏡的に拡大すれば，社会的にも人道的にもなるとしても，別段の意味にとる必要がなく，ここではお芝居そのものが多分に物を云って居るのである。だから，彼等の反抗的な気分の延長が最後の混乱になっても，それは大げさな革命への暗示とか，ストライキとか云ふものからは離れた気持で，一種のお茶番と見て差つかへないものなのである。別段の意味もないこうしたものも亦，立派に存在していいものであり，結構愉快なものである。小山内氏の演出に就いては，いつも一幕物に独特の冱えとか慣れとか云ふものを感ずるが，作品としても筋を追はないで，一寸した幅を面白く扱って居る。殊に奈落の演出者としては，これが他の人の作であったにしても，小山内氏は最も適任だらうと思はれるに於ても，これは望み得べき最高のものだらう。

九日

午後，金沢庸治[88]君を尋ね。江波の所にまはり，夕食後，江波と銀座に出る。

十日

午後，築地にマチネーを見に行く。出物はアルト・ハイデルベルヒ[89]。だが今度のは三幕に書き直して，道具もリウダアの酒場一杯だけにした，ほんとのマチネー向きにしたもので――まあ一昨年の思出として気楽に見られた。

十一日

石膏屋が来てくれる。夕方散歩。

十二日

午前雨。午後，三沢が来，江波が来，三人で吉祥寺に三角の新らしいアトリエを訪問

スル。皆で賑やかに夕食を契〔喫カ〕し，高橋君を皆で送りに東京駅に行き，銀座を歩いて遅く家に帰る。

十三日

曇，晴。珍らしく，珍らしい人が来る。朝，本田の叔母〔伊萬子〕様が見え，田辺の英さんが来，午後，小城の小母〔たか〕様が来られ，夜は兄の友達が来られる。

午後はよく晴れると共に，風がひどい。

寝床についてから思ひついたら，今日は私の誕生日だった。大変な誕生日だった。

十四日

晴。風強し。朝，小石川へ行ったがだれも居ないので，目黒に行き，昼食後，遠山サンをお尋ねし，三時頃帰ったら，澄〔小城〕ちゃんと増子〔小城〕ちゃんとがまだ遊んで居た。トランプをしたりして，夕食後二人を送って宮崎さんに寄り，目黒まで行って，十時頃帰って来る。久々で下駄ばきで歩き過ぎたので，大分労れた。十二時就寝。

十五日

晴。思ひきって暑くなる。夏らしく，日の光がぎら〳〵照って，家の中にじっとして居ても，体中が汗ばんで居る。暑くなって気持がいいので，仕事をしたいと思ふのだが，さて取りかかってみると，どうも頭がよくない。眼を患ってからどうも根気がなくなった。それにしても，此の頃，頭が散漫でいけない。一つ事に入りこめないで，他の事ばかり考へるといったような，他の事にかかると，前の事を思ひ出して居るといったような，一つことと他のこととが，丁度所を違へて了ったような。どうも頭がよくない。だが又，これには立派に理由があるのだ。そしてその原因が又自分にはどうすることも出来ないので，自分は只々多少苛々しながら，原因のなくなるのを待って居る。それはちょっとはなくならないが，当然なくなることも又明らかなのだから，自分は根気よく時の来るのを待って居るのだ。

〔欄外に記す〕
［一ツコト，ナサントスレバ他ノコト思ハル　他ノコトニウツレバ前ノコトノミ気ニナル，二ツコト，ドウニモナラズ，モドカシキコト］

十七日

天気はよく続いて，なか〳〵暑い。けれど，又，時たま吹く風は乾いて涼しい。江波から鎌倉に行かないかと誘って来る。行き度い。だがまだ〳〵行かれない，少しばかり仕事らしい仕事をしなければ。夕食後，三沢の処を訪ねようと思って家の前まで行ったら，三沢の母親が蚊帖をつって居られるのが見えたから，敢て訪ねないで引かへす。七

時半だといふのに。この暑いのに。帰り，大久保の通り，金龍寺といふ小さな寺のお祭りで賑はって居たので，自分も中に入って安っぽい茶番を暫らく立って見て居たが，面白くもないから帰って来る。
〔欄外に記す〕
［ヤヤ暑キ　夏ノユウベノ　マチ行キケレバ
金龍寺トウ　小サキ寺ニ　人群レテ居リ
此ノ寺ノ　小サキ祭ニ　人群レテ居リ
人群レニ　イツカマジリテ　茶番ナド見キ
人群レニ　マジリテイツカ　アドケナクナレリケリ］

十八日　日曜日

十九日

曇ったり晴れたり，降ったり止んだり，風が吹いて蒸々暑い。夜十一時になって，少しばかり雨らしい雨が降ってくる。

二十日

降りまでもしなかったが，雲が多くて蒸々した。夕方から築場〔地〕にゆく。出物は，「愛と詩と国家奉仕について」[90]（アレクサンドル・ブロオク），「心にもなき悲劇役者」[91]（アントン・チェェホフ），「陽気な死」[92]（ニコライ・エフレイノフ）。

ブロオクの「愛と詩と国家奉仕に就いて」は，対話であって，劇ではないとことはってあるが，全くその通りで，対話であって，劇ではない。其上ブロオクは，象徴派の詩人だ。彼は□□□□□（ヴェニスを）譬へヴェニスを歌っても，つまりは彼の幻影を半分に，技巧を半分歌ふのであって，

沈黙の水の上，遠くひろまる――
ただ幻のしのび足
かくて，黒き流れの上に，我が頭は
なげけるさまの影をおとす

こんな風に歌ふのだ。だから恋をしてゐる詩人にしても，道化――常識的な男にしても，お役人にしても，結局彼等は詩人なので，彼等の言葉は技巧的で，雄弁であるにもかかはらず，智的〔ママ〕にはかなり単純であり，それで居て，それらは象徴の本質として，あまりにも正確である為に（これは皮肉ではない），あまりに莫〔漠〕然として居るのである。ここでは，愛も詩も国家奉仕も思想ではなくて，より深い所の思想――言ひ得べくんば，頗る個的な信仰であり，それらは論理的にはあまりに単純な為に，詩的には益々深くなって――恐らくは，言ひ得べくんば，あまりに深くなって了って居るのである。問題は

国家奉仕で，愛と詩とまでは，例へばもっとメーテルリンク風に，純然たる感情的象徴，信仰的な或は迷信的なパッションにまでつっぱしってしまってくれることを，そして，国家奉仕に就いてならば，例へばもっともっともっとショウ式に，独断的に露骨にやっつけて貰った方がわかりがよくてよい。つまり，理屈ぬきで感情的に引張り込むとか，さもなくば詭弁でも何でもかまはないから，台詞に面白味を盛って貰ひたいものだ。でなければ，私達は只只まごつくばかりか，つまりは退屈してしまふ。

チェェホフの，「心にもなき悲劇役者」は譬へ，たわいがないにしても，そして汐見氏の芸が多少鼻についたにしても，又無邪気で面白い。チェェホフの着眼はほんの平凡なものを生かし，そして彼の検〔顕〕微鏡的に拡大して行く技巧，台詞の巧みさは独特だ。

最後に「陽気な死」は，懐かしいものだ。五六年前に愛読したもので，併しどうも縁がなくて，演出されるのを見たのは，今日がはじめてなのである。そして，此の芝居は，今見ても面白い。或は今見るから，益々面白いのかも知れない。芝居が面白くて，演出は周到だ。私は青山氏の演出としては，写実主義的なものよりも，幾分様式化されたものの方が好きだ。それは，氏が写実主義的に書かれたものを演出すると，それはあまりに写実で，舞台的なエフェクトを弱らせ，その上ちょこ〳〵と此の様式化の変形がポーズやアクチングを通してのぞきみするので，時たまきざに見えたり，いやみに思はれたりするからだ。だが，今度の演出は大変いい。

二十二日

夕方，初台の松平の新居を尋ねて，石膏を取ってくる。

二十三日

夕方前から大変な雷雨で，花壇の花草はたほれ，家の中はあまもりし，電光雷鳴相つぎ，猛雨は屋根から屋根を灰色に煙のようにけむって降りつけたが，暫らくで止み，雲の多い空には月が大分太った。そして，又々十一時を過ぎて，雨がしとしと降ってゐる。

二十四日

曇り。終日曇ってもやもやと蒸暑い。

朝早く江波を尋ね，一緒にブロンズ屋に行って貰はうとしたが，「まあゆっくりだれようぢゃないか」と，江波が云ふ。全く雲が多く，風がなく，体中を一寸も何か見えない袋でつつまれたような日だ。二人でたわいのないことを喋ったり，黙ったりして昼食も食べ，さて四時までもそんな風にして居る。それから花を一年，それからやっと二人で出かけ，ブロンズやに行ってくる。そして帰りは，鶯谷から東京駅へ出，京橋から銀座へと歩きビール，カフェーテリヤで食事，ビール！

わり合ひに早く家に帰ったら，本田サンが来て居たので，十二時前まで仲間入りする。

其頃になって又雨

二十五日　日曜日

雨が降りそうで降りそうで降らない朝の後に，それよりは幾分確かな午後が来たので，駒込に本田サンの所を尋ねる。夕方になって，本田サンと散歩に出，一まはりして駒込橋の上で涼みながら話して居たら，偶然倉沢に逢った。

二十六日

午頃，江波が来る。午後雨。夕方から江波と夕食を止めてビールを飲みに出る。雨止む。

二十七日

夕食後，英子サン達をつれて，譲二叔父様の処をお尋ねしたが，お留守だった。

二十八日

朝八時五十五分の汽車で，英子サン達をつれて鎌倉に来る。午後，子供達同勢を引つれて海に行ったが，水がつめたい。汽車で春江様にお逢した。夜，譲二叔父様が来られる。

二十九日

譲二叔父様は，朝のうちに帰られる。終日，日が照るでもなく雲が多く，風は少しでも吹かうとはしないで，蒸々と息苦しい程暑く，不愉快だった。夜，昌道をつれて散歩，海岸〔浜カ〕博覧会を暫らく見て帰ると，間もなく雨が降ってくる。

寛様

暑いぢゃないか。毎日からっとしないで。今日の不愉快さはどうだ。相変らず学校に行ってるとすれば，すばらしい元気と云ふべきだ。

小生，昨日より鎌倉に逃げ出した。昨日来て，昨日海に入った。昨日は水が馬鹿に冷たかったので，ふるへて上った。今日は，昼寝をしてしまった。夜，海辺に素人芝居を見に行って今しがた帰ったら，ぱら〳〵雨になった。これで明日は晴れれば，却って少しは気持がよくなるだらう。海は相変らず賑はってゐる。赤いの黄色いの，ダンダラ縞ポツポツ，細いの円いの，バックシャンでいっぱいだ。

まあ，久しぶりで目にするから，多少好奇心を満たしたにした処で，気持のいい分子は多いとは云へないな。妙に高慢ちきで，妙に取りすました気持，甘ったるい見せびらかし，だが又あゝしたいい身分の人は，つまりあゝなるより仕方がないのかも知れないし，或はそこにはもっと自然な必然性と云ふようなものが，われ〳〵自身に内在するのかも知れないな。これはあまりに同情的な観察だと云はれれば，多分それはそうなのだ

らう。何故と云って，多くの場合には，斯のように客観される前に，多分はもっと単純な反感で片づけられるようだからな。だがどっちにしたって，たいした事もないさ。つまりはわれ〳〵にしたところで，気分と環境と気候の加減と相手そのものへの好悪とで，いくつかの異った世界を経廻って居るようなものだからな。或はこんな気持こそ気まぐれなのかも知れないな。何故と云って，小生のようなガムシャラな人間にしては，あまりに大人しやかな見解とも思はれるからな。だが又小生のようなナイヒリスチックな人間は，消極的には寧ろあらゆるものに，ある種の同情乃至肯定を持って居るものだ。

それもどうでもかまはないとして，海辺で見る十二, 三, 四, 五，位ひの女の子は実に可愛いいな。少し大き過ぎると，魅力と反撥とが交々，或はごっちゃになって，単純な好感，率直な客観的賞讃〔賛〕をひっくりかへしてしまふ。だがどうもいつの間にか，たいした女性観になってしまったようだ。小生はいつも多分こんな風だから，色んな意味でロマンスを取り逃がして来たのかも知れないな。だが又，だまり屋の君自身が，時にそんな風なのではないかと余計な心配をしてやる訳だ。

では，五日頃，東京に帰るだらう。

あと一月だ。元気を出して大いにやり給へ。祝福が待って居るだらうから。

久功。

三十日

夜中，降ったり止んだりして居たらしく，朝のうちぱらぱらして居たが，やがて美しく晴れて，凉しい風が吹いて，夏らしい日が強かった。

午後，海に行って帰ったら，忽ち驟雨沛然，流すように打つように雨が降り，遠雷して，晴々しい。夕食後，散歩ながら町に用たしに出てくる。

三十一日

天気爽快，朝，江波兄弟と菅野がやってくる。朝から海に行き，昼に一先づ引上げ，食後皆で，昌道もつれて逗子に行き，四杉サンの処で一休みして，夕方まで又海に入る。四杉サンで皆で夕食を御馳走になり，九時の汽車で帰り，鎌倉で一同降りて，駅前で再びビールを祝し，皆は十時の汽車で東京に帰る。

八月

一日　日曜日

朝から風がなくて蒸々と暑い上に，昨日のつかれで体が無性にだるい。午後，昼寝をして，夕方前海にゆく。浜で湯地，上原七之助夫妻に逢ふ。晩は皆で海浜博覧会に行く。浜で星三郎に逢ふ。

二日

天気は随分暑かったが，風があったので凌ぎいい。朝，荒木サンと秋庭サンに行ってくる。午後，秋庭サンの武チャン，千代チャンと子供達をつれて海に入る。

駅の此方で岡村於兎彦に逢ふ。岡村は立派な海軍士官，中尉になって演習の後か何か，黒々と日に焼けて，髯まで伸びて居た。

三日

暑かったが，風は吹いた。昨日のように晴々しくはなかったが，雲って居るといふ程でもない。午後，秋庭の武チャンが一人で来た。千代チャンは疲れて来ない。又皆で海に行き，帰り自分は浜でローラースケートをやって見た。何年ぶりかですべって見たが，何処となく力が入って怪しげだ。面白いといふよりは，暑かったので，ぢきに止める。

四日

昨夕，可成の強震があってから，急に風立ち，今日も朝から風がつよい。

朝，逗子に行って，露チャンをつれて帰る所だったが，露チャンは昨日，お母様につれられて帰って居なかったので，昼前鎌倉に帰り，一時三十八分で東京に帰る。

ほんの一週間程の間に朝顔のつるが延びるだけのびて，花壇は藪のようになって居るので，お茶ものまずに手を入れ，夕食後，三沢を尋ねる。

五日

日茹る如，けれど又風あり。午後，ブロンズ屋に行き，石膏屋に行き，江波の所に夕方行く。夜，江波と銀座に出る。

六日

ぱらぱら雨が二三度。夜，江波を尋ね，一緒にブロンズ屋に行く。

七日

寛チャン

表現派は既に過去のものとなった，と云ふ声が，大分前に聞えた。構成派が表現派の巻ぞえを喰って，生れたばかりで忘れられた。そして其後に何が残ったのだ。何がやって来たのだ。此頃，新聞，雑誌を見ると，大衆文芸の全盛だ。大衆文芸，大衆文芸，それから兄弟分のプロレタリア・アートだ。それかと思ふと，極めて退屈な新感覚派運動だ。そしてもう一つ，これは又元来極めて内気であるべき，謙遜であるべき心境芸術が，がらにもない泣声で，駄々っ児のように一人よがりを主張してゐるではないか。

兎角流行の恐ろしさ，今時人間たるもの，大衆文芸について，プロレタリア・アート

に就いて一言なかるべからずといふ有様だ。

○

依って余も亦茲に大衆文芸に就いて，一言あるべきが如く書き出したものの，御承知の如く，余の生活，思想はあまりに大衆的でなく，又大衆的でありたいとする意志も，余の持ちあはせない所である。依って，大衆に触れたり，大衆から離れたり，勝手に一つ喋ってみよう位ひな所だ。

○

余は理路整然と云ふ奴を持ち合はせないから，手に触れた所，足にひっかかった所から始め，中途で切り，意外な所に飛び，或は曖昧糢〔模〕糊のうちに終るかも知れないから，始めからあまり気にしないでくれてかまはない。

一体余は，人事を極めて無造作に二別していいと思ふのだ。即ち素直なるものと，ひねくれたるもの，之である。［〔欄外に記す〕ここで素直なるものと，ひねくれたるものと云ふのは，極めて皮肉な意味であって，目下に於ける伝統とか因襲とか概念とか，事際〔ママ〕状態とかに対してである。（勿論これは二つの性質として，もっと広く深く開展されてもいいのであるが，ここでは単に軽い皮肉な意味に止めて置く）］　前者が俗であれば，後者は非俗或は超□〔然〕俗的だ。此の二つの対照的な語の概念から云ふと，どうも後者の方がよさそうに思はれる。所が語は勝手なものだから，どうにでもなる。即ち前者を大道と呼び，後者を偏狭奇矯と成せば，直ちに前言に反抗出来るといふものだ。だから，此の間の甲乙は茲では暫らく抛って置くことにする。

○

そこで手取り早い所が，君は先づ前者に属するから，事物を素直に受入れ，素直に吐き出す。人間に対しては誠に平和に，自然に対しては同情深い。積極的にまで発展すれば，益々人がよくありのまゝの自然を愛し，安住し，更に礼拝する。君――すっかり君にきめてしまったが，是れは傾向に就いてのみ言ふのだから，其のつもりで――は戦闘が嫌ひで，人巧が嫌ひで，そして君自身は君自身の素直さから其の上に，東洋的な伝統を透して清楚が好きで，静寂が好きで，深い雅致をよく理解する。

○

斯うなると，余はさしづめ後者で，常に疑ひ常に反抗するから，人神に対しては常に不信に陥り，自然よりも人巧に興味を誘はれる。余にとっては，人間はきたならしいもので，運命は呪はるべきもので，道徳は不安定で，罪は□□□□□□□□□□（救はれないもので、）許されないもので，神秘は感激からではなく，関係の不可知から来る。更に戦闘は其自体勇ましいものであり，静寂と永遠とは，死の隣りのものであり，赤には魅惑があり，茶気と気まぐれと多角的粗雑とは，愉快なものだ。

○

そこで余は，極めて大ざっぱに，芸術に三種ありと云ふ。一つは大衆芸術である。大

衆はレベル或はレベル以下であるから，常に最高所よりも下にある。随って，「大衆」を標榜する芸術の「価値」は，常に一段低い所にある。けれども又，最高所の人々のみが芸術の恩沢に浴すべきであるといふ理由はないから，そして大衆は常に社会の大部であるから，大衆芸術が持つ社会性は，常に大きく，そして此の社会性の為に，大衆芸術は「価値」を無視して立派に存在する権利を持つ。

〔×を附す〕

〔欄外に記す〕
［そこで,芸術を大ざっぱに二種にわけることにする。第一ハ］,□□□素直に,あるがまゝ（一つは）の自然を対象とする所の自然派的な芸術である。これは自然的であり，［外面的であり，］〔欄外に記す〕従って人々は或る程度まで理解したと勝手に思惟するから，結果に於ては余程大衆的に見えるけれども，又一方作者は結果にはおかまひなく，もっと□□□□［所謂芸術的に］〔欄外に記す〕彼等の心境を深く深く掘り下げようと努力し，又大いに深みに入って居るつもりなのであるから，そして実際そこにある露骨な，或はほのかに注意深い技巧は，一般大衆には全く理解出来ないのであるから，そしてそこに「価値」が□□□□□□□□（高められて行く）どんどん高められて行くのだから，これは極めて御都合主義□□□□□□□□□（的なものである。）に適った芸術であるとも取れると共に，正しく芸術の大道であるらしい。

○

□□□□□□□□（そこで残って居る）もう一つの芸術は，始めから技巧を貴ばず，概念的な価値を否定してかかり，思想的には懐疑に埋もれ，生活的には虚無の上に積極の殿堂を築かう意気であり，［一切虚無の上に築かれた積極主義であり］〔欄外に記す〕，表現的には，自由であると共に，［チャチ］〔欄外に記す〕である。懐疑的であるから，概念づけられるような価値，形式的に統一されるような技巧とは相入れない。虚無的ではあるけれども，悲観的ではないから，そして感情は極めて気まぐれに自由の世界の何処にでも興味を握むことが出来るから，生活は益々高踏的に享受せられ，表現は無拘束に多角的である。

○

（後は明日でも明後日でも亦，書き続けることにしよう。ひよ〳〵と一日涼し過ぎるぢゃないか。余は暑いのが好きだから，八月の最中にこんな日があると，一日損をしたような気がするが，君は又兎も角涼しくていいぢゃないかとでも云ふのだらう。）

八日　日曜日

雲が多くて涼しい。朝，小石川へ行ってくる。

○

↘寛チャン

昨日の余の手紙は，君には腑に落ちない所があったかと思ふのだ。何故なら，余は漠然と芸術といふ言葉を使って，文芸界の運動と美術界の傾向とを，極めて無造作に，ちゃんぽんに取扱ったからだ。□□□（例へば）そして文芸界の運動と美術界の傾向とは，その歩調

に於ても，内容に於ても，其間に大分の相違があったからだ。例へば，文芸界に於ける所謂大衆文芸運動は，勢仲々すさまじく，実際的にも大いに地歩を確〔獲〕得して居るに比して，美術界に於ける一寸これに準ずべき街頭芸術運動は，正しく運動の為の運動に終ってしまったような形だ。それは，美術界に於いて，此の運動にたづさはった人々が適任を欠いて居たのも事実で，其処には虚無的な思想や価値転換の為の示威や，ダダイスチックな行動などが多分にあって，名を冠って名に応はなかったと云ふような，全然横槍的な阻害があったとは云へ，実際的には前に述べた如く，大衆文芸と歩調を合はすべくもない結果に終ったのだ。それから，心境小説だが，こいつは誠に殊更らしく文芸方面に於て称〔唱カ〕導されたが，多少ちゃんちゃらおかしい次第で，美術方面では，極めて慎ましく，併し実際的には実に広い範囲で真率に研磨され，発表されて居るのであって，それは寧ろあまりに平凡過ぎる位ひにさへ思はれて居るのであって，殆ど常識的なものとなって居るのである。それから，新感覚派に至っては，これは殆ど文芸方面でのみ，線香花火的に一部に称へられたのであって，こけおどしで内容貧弱，まあ変態的に表現主義を骨ぬきにしたと云ったようなものだ。表現主義には，実にオリヂナルな表現主義的精神があって，奇怪な表現の底に力強いものが漲って居るに対して，新感覚派にあっては，奇異な表現はそのまゝ平面的な衒気であって，精神的な意味での高いものは，何等存在しないもののようだ。

〔×を附す〕

○

さて又，大衆文芸に後戻りするが，これは始めから大衆即ち社会の平面的に最も大きな部分を対象とするのであるから，その中心興味も亦当然向上的でなく，平面的に平面的にと拡大されて行くようなもので（だから大衆文芸は何処まで行ったって停滞，停滞，停滞だ），従って価値も又始めから向上的には企図されず，実際上の大衆生活の慰安以上に出でず，人間生活の深奥乃至永遠的な目的理想にはふれようともしないものだ。

そこでその内容は又事件の突発的発展，只に只に大衆の好奇を期待する為のトリック等，平面的な誰にでも一通りは，或は其時々にだけ持ち得る好奇興味にのみかかづらって居るので，勿論其処には，感情的な誘惑乃至陥穽等は技巧的に研究され，効果的に洗練されるにしても，全然前見せ的にのみ企図されるのであって，其処では感情的機微，高義に於ける精神的なる一切のものに対して盲目なのである。つまり大衆文芸なるものは，社会的には立派に存在意義を持つにしても，高い意味での芸術的価値は始めから目指されて居ないので，此の意味では大衆文芸運動は，芸術の絶体〔対〕価値を否定してかかって居る□□□□□（と見られる）のである。

〔×を附す〕

○

さて大衆文芸に就いては，此の辺で止めることにする。何故なら，余は芸術に三種あ

りとして，大衆芸術なるものを此の中に加へたけれども，それは存在が大きかったからだけで，余一個としては，これは芸術の範疇に入れて居ないのである。

で余は素直なる芸術とひねくれたる芸術に就いてのみ，もう少し続けて見ようかと思ふのだが。（明日になって面倒臭くなるかも知れないな）

〔×を附す〕

○

八月九日

↘寛チャン

さて，余はそろ〳〵我が田に水を引かうとする。即ち余は，前述の如く，客観的には立派に素直なる芸術を認めたばかりなく，それを以て所謂大道とまでなしたのであるが，今度はそれに就いての，余一個としての不信任を披瀝しようとするのだ。だが先づ第一に，それが水かけ論的にならねばならない理由がここにある。即ち芸術の絶対価値に就いては，余等がこれを絶対に疑ふべき反証を握み得ないと共に，君等に於ても，それを絶対に主張し得べき，何等の査証をも提出することが出来ないのであって，事実上この芸術の絶対価値の有無は，只に個々の信仰に係はるのみなのである。そこで，君等があくまでも外面的なる自然に準拠するを以て芸術の真道となすのも，只に君等の信仰にのみよるのであって，余等が外面的なる自然を極めて気まぐれに変形し，意識的に「作品」を捏ね上げるとしても，そうしてそこに内面的効果を主張するとしても，それは全く余に応はしいことなのである。

○

さて余は，ここで信仰に就いても又一寸，余の独断を敢てすることを許して貰ふ。

信仰は，われ〳〵全人類の全歴史を通して，人間生活の光明となり，指針となって来た。それは実に長い間のことで，現今も尚九十九パーセントまでもの人類に影響して居るのである。そしてほんの最近代に至って，ほんの一パーセントにも足りない人間が，在来に全くなかった処の無信仰者になったのである。余の云ふ信仰とは，［一元乃至二元に統整（〔制〕）せられたる高等宗教を］，□□□

が入った。そしてダダイスト［の出現に〔欄外に記す〕］に依って，信仰は遂に永い永い間の専制を抛棄しなければならなかった。とは云へ，ダダイストは信仰を超越したのではなくて，信仰と血みどろになって戦ったのだった。そして，ダダイストの奮戦の犠牲によって，ようやく現在に於ける，□□□（小数の）極めて小数（少）の［何等の〔欄外に記す〕］反動的精神に影響せられざる，より根本的な無信仰者が出て来たのである。

○

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

終日雨が降ったり止んだり，梅雨時のように寒い。

十日

↘寛チャン

余は現代の自由無信仰者に就いて語ったが，これは時間的にまだ実に新らしいもので，此の自由者は，これから色々な試練に逢ひ，堪え，打勝つべきであらう。が兎も角，此の無信仰者は，在来の信仰を概念視するのである。即ち前にも一寸触れた如く，余は真の信仰は，野蛮人乃至未開人，又古代人の間に於ける如き，生々とした迷信でなければならないと主張する。何故なら信仰は，信仰の貴さは，人間本然の純精神的なるものの魅惑，超理性的なる驚畏であるべき筈であって，文明人の間に於ける如く，強ひて一元的に統一され，又其の内容が説明的に総合せられ，或はそこに倫理的道徳的なるものとの融合提携を示し，あまつさへそれを意識的に奉ずるが如きに至っては，それは信仰の積極性を失なったものであって，社会性を拡大し，統一□□□（性を確）的な効果を確立するに便であるとは云へ，信仰其ものの本質からは，益々遠ざからねばならないのである。［信仰の積極性といふ〔欄外に記す〕。云ひかへれば，信仰意志の消極性を云ふのである。何故なら，信仰の本質は個人の意志を越えたものでなければならない。］ そして，斯の如き信仰の概念の中に，自ら縛し自ら死する如きは，生命たるべき，生活動力たるべき信仰の，思ひも設けない犠牲でなければならないのである。

○

そこで余は，これと同じことが，殊に芸術論の盛になり過ぎた十九世紀以後の芸術に就いて云はれはしないかと思ふ。そして，殊に丁度その流れを盲目的に汲み込み，自然派的なるものを以て，唯一的に芸術を概念づけたわが日本の洋画，彫刻界に於て，最もその馬車馬的概念信仰の禍が大きいもののようだ。全くあまりに統一的に，論理的に説明されすぎた，［誤まれる〔欄外に記す〕］美学的教養が，正直な，率直な，自由な，大胆な，露骨な直感乃至個人的特殊性の披瀝を阻害して居るのだ。其故に，余はここに敢て云ふ。すなほなる芸術は，大道を行く芸術は，それが前述の如き特殊概念に影響されてゐる限りに於ては，人間本来の純精神的なる芸術衝動に断然悖るものであり，対全般社会的にひねくれたる芸術，公然既成芸術価値概念を無視する芸術こそ，却って精神的に，本質的人

間としての自己に対して，すなほにして忠実なるものである。

○

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

天候回復して，暑くて気持がいい。午後，三沢と江波とが来てくれる。

十一日

↘寛チャン

余は敢て云ふ。自由人無信仰者の精神生活は，最も気まぐれなものであり，対社会的なる伝統習慣に対する悔〔侮〕蔑，一見奇怪なること大いに茶人的である。思想的懐疑は，懐疑に次ぐ懐疑は，世界より世界を永遠に新らしき世界を開拓する鍵である。虚無は決して常に悲観を導くものではない。無形体の煙の中に，立派な動的姿態があり，色があり，香りがあり，非実体の世界にすばらしい蠱惑的音楽がある。虚無は亦，空間的に時間的に魅惑に充ちた，極めて多角的な現はれを持つ。自由人の持つ芸術は，斯くて極めて気まぐれで，茶気があって，虚無に根ざしながら，絢爛多角なる生命姿体〔態カ〕である。自由人の個性は，誤まれる信仰概念によって，丹念に築き上げられたる，固定的なる一様式（そんなものが個性ではない！）ではなくて，極めて気まぐれに，極めて自由なる時間的変転空間的多角の，おのづからなる総和でなければならない。

○

ここで最後に余は，一寸此の気まぐれ芸術の価値問題に触れて，此の手紙を一先づ終ることにする。斯の如き何等の概念からも全く自由な個人的な製作に対しては，観賞も亦，如何なる概念にも煩はされてはならないのである。即ち価値も又絶対に個人的なもので，それは只只一に，その自由人の高踏的なる生活内容及びその無信仰者の，自由にして必然なる表現に係はるものである。それは，内容的にも，表現的にも，全然高踏的であるから，従って価値は社会性とは全く関係を持たない。ここにある価値は，何等の基準的概念を越えて居るから，従って高下の絶対を許さない。只々同じ自由人，同じ無信仰者の直感が，偽らざる直観が其の価値を見出し，其の価値を意味づける唯一の価値である。そして，余の前にかかる作品が現はれるならば，余は之を以て最も高く評価するのであらう！

終り

○

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

今日も亦茹るように暑い。今日は英子サンの所が引越したので，午前中行って手伝って来る。

十二日

暑い。ひどく暑い。が天気が続くので，気持がいい。夜，一寸田辺サンに行ってくる。

十三日

相変らず，ひどく暑い。風があるし，気持は晴れ晴れして居るのだが，遺に根気が出ない。

十四日

少し遅く昼食をすませて，煙草を吸って暫らくすると，小城のおばさんから電報で，直ぐに上原サンに来てくれと云ってくる。行ってみると，保が幾日か家に帰らないこと，それから家の兄も小城サンには居ないこと――兄は家を九日の夕方出て小城サンに行き，十日の朝小城サンを出たとのことだった――などで……夜，駒込に本田サンを尋ねて，学校の方がどんな風になって居るか調べて貰ふことにする。

十五日　日曜日

曇って居て風が涼しくて，いやに涼しくて，烈しくて，夜は寒いようだ。

十六日

曇っては居るが，昨日のように風がなくて，涼しくもない。朝，小城のおばサンから電報で呼び寄せられて行く。兄と保チャンとは，昨日夜帰ったこと。孝雄〔上原〕さんが来て居て，一通り話しを聞く。謙チャンも呼ばれたと見えてやって来た。それだけ。

十七日

小雨，降ったり止んだり。小城ノおばさんからたのまれて居たので，朝，目黒にゆき，保チャンをつれて？　菊名にやってくる。暫らく休んだ後，皆が浜に魚を買ひに行くといふので，一緒に浜まで行ってくる。夕食後，暗くなってから，保チャンと浜に行く。

十八日

すばらしく綺麗に晴れたので，澄子，増子，元子と皆で海に行く。水が馬鹿につめたい。昼前に帰り，午後三時五十分の汽車で鎌倉に来る。三郎サンが来て居る。午後雨になる。

十九日

午前中雨。午後，辛うじて雨が止んだので海に行ったが，水がつめたくて，震へ上るようだった。

二十日

晴。午後海に行く。

二十一日

午前中雨。午後，雨は止んだが，僅かに止んだと云ふだけで，薄暗くて凉しい。直矢叔父様の三年祭を午前中に行ひ，午後は只もうぶらぶらして居る。三郎サンは，昨日浜で釘をさしたのが，どうもあまりよくないので，二階に一日引込んで了って居たが，夜お医者が来て，経過が面白くないといふので，シップをして氷で冷やしたりして居る。

東京から手紙で，兄は遮二無二菊名に出かけたと。

二十二日　日曜日

昌生叔父様から急に電報で，十一時に帰られるよう云って来たので，子供達と十一時二十五分の汽車の心算でお迎へに行ったら，山門のこっちでお逢ひしてしまった。朝が晴れやかで，風が凉しかった。午後曇って来たが，昌道と海にゆく。

三郎さんの怪我したことを東京におしらせしたので，川上の松子叔母様と石丸の末雄サンが来られ，終列車で帰られる。

夕暮前から寝るまでに，二三度ぱらぱら雨。

二十三日

天気よし。午後海にゆき，夕食後，八時の汽車で昌道をつれて帰京。母が一人でぽつねんとして居る。兄は三浦にゆく途中，自動車が転覆して体中にけがをしたのだそうで，久顕は，兎も角，様子を見ながら看護に行ったのだった。

二十四日

昌道をつれて三越に行き，国技館に樺太展を見，江波の処に寄って，四時頃帰って来る。遅く，久顕一人帰る。

二十五日

曇。午後，久顕は昌道をつれて鎌倉にゆく。自分は，三時頃，所要あって目黒にゆく。文チャンは今日，赤十字に入院したとの事。

二十六日

何て云ふ事か。九月の半ばか十月が近いといふような凉しさだ。朝，床の中で冷え冷えして目が覚めるのは，心細いではないか。

何て云ふいやな日が続くのだ。相変らず兄が，兄がだ。鎌倉でぶら〳〵して居たのも，

東京に帰って方々から引張られて愚痴を聞かされたり，たわいのない憶測や推断に退屈するのがいやだったからだ。東京に帰っても，さしづめ方〔包カ〕囲攻撃には逢はないですんでは居るものの，耳から目から，遠慮なく余計なものはやっぱり入って来ないでは居ないのだ。

自分の事と云ったら，何一つしやしない。何時からともなく，漠然たる期待のうちに待って来た。待って来た。漠然たる希望は九月だった。だが九月はもう来かかって居る。だのに，兄が兄がは，まだ〜〜こんがらかって，ほぐれそうにない。希望は消えたのではない。だが明らかに遠のいたのだ。待たねばならないから待つ。何うする事も，時より外には出来ないから，只只待つ。待ちくたびれた。だが，待たねばならないものだから，待つより外あるまい。

夜，本田サンが来て下さる。

どうだ，今夜，縁の下でこほろぎがころころ鳴き出したではないか。しきりに鳴くではないか。

此の間，一寸雑誌を手にして小さな小説を見たら，斯んな事が書いてあった。彼は苦闘の三年間を思ひ出した。そして次ぎの悲惨な二年間を，その次の不愉快な三年を，そして現在の難困にまで思ひ来□（た）ったと。だが私は小説の一番しまひの頁をあけて見たら，そこにはとうとう春が来たと書いてあった。

今私は，疑ふ。とうとう春は来るものだらうか。彼のうちの一人には，決して春が来ないことがないだらうか。私が今夏が終らうとするのに，今から新らしい夏が来ることを願って居るといふような事は，とんでもない事なのではないだらうか？

二十七日

朝，三越に造型社[93]の展覧会を見に行く。中で立派なものだと思ふのは，吉邨二郎氏の諸点（絵画）と安永良徳氏の諸点（彫刻）とだ。尤も安永君のは，中に自分のものになりきって居ない，云はば借りものらしいものが時々見えるが，それにしても安永氏のは，もう半歩で全く自由な世界がひらけようかに見える。山上嘉吉，岡本庸〔唐〕貴，吉原義彦の諸氏は，旧形を破って「新形」にはまったとでも云ふか，現代露西亜辺のヴァミリオンの夢，ヴァミリオンと多少の現代社会的意識とに，特別な概念を与へて自ら縛って居るかに見える。榊〔神〕原泰氏にも，多少そのような傾向がのぞき，その上もっと榊〔神〕原君にとって気の毒なことには，他の若い人々があまりにうまくて，と云ふよりも，元気があって，自由であって，オン大の榊〔神〕原氏が多少押しつけられ気味であるかに見えることだ。

総じて云ふならば，若い人々のせいか，そのロマンスの内容こそ異なれ，多少とも赤いロマンチシズムが残って居るのが惜しいように思はれる。そして，一人一人に就いて見る時，又全体に就いて見る時でさへ，内容にも表現にも，幅がないうらみがある。其の意味でセンチメンタリズム乃至ロマンチシズムの跟〔痕〕跡の少なく，自由な幅を持って居

る吉邨二郎氏及びそうした傾向を示して居る安永良徳氏が，自分には最も興味がある。

帰りに江波の処に寄ったら，家に出かけたといふので，家に帰ったら江波が待って居た。一緒に原瀬の奥サンの処を尋ねたが，留守なので，吉祥寺に三角を尋ねて，夕食の御馳走になる。

二十八日

この頃になって，又々熱〔暑〕さが盛り返してくる。夕方，江波の処に行き，一緒にブロンズ屋に行った処，ブロンズ屋先生，病気だったとの事で，たのんだブロンズがまるで出来て居ない。こいつは，今更ながら閉口。

二十九日　日曜日

石膏像二点を持って，朝から江波の処に行き，一緒に御徒町に漆其他の買物に行き，江波には帰って貰って，自分はブロンズ屋にまはって，石膏のまゝの一点を持って，江波の処に帰る。中島の奥さんが，急に東京に出て来た。暫らく江波の処に居るらしい。午後，石膏に色づけ，夕食後江波と散歩し，十時前，家に帰る。

母が今日赤十字に行ったら，兄が昨晩帰って，病院に宿って居たとの事。午後，一寸家に帰り，晩又病院に行ったとの事。兄に就いてなら，別段の興味もない。誰か外の人にきいて貰ひ度いものだ。

三十日

蒸々と暑くて，じっとして居ても，体中に油のような汗が渲む。

独りですましては居ても，いやな日は遠慮なくやって来る。午過ぎに五反田の待合から人が来て，何かもぐ〳〵云って帰ってゆく。だから仕方がないから，夕食後，上原サンまで行って来る。おばさんとはあちゃんだけで，誰も居ない。暫らく話して居ると，小城サンの女の子が四人でやって来る。やっぱり昼間，五反田の待合がぶく〳〵云って来たので，子供達ばかりで心配して居たのだ。もういい。うるさい事々よ。あっちに行け。それにしても，英子が今日病院に行ったら，兄は昨晩一寸来たきりで，居なかったそうだ。それもかまはない。兄に就いてならば，誰にでも他の人に聞いて貰ひ度いものだ！

三十一日

朝から江波の処に行き，兎も角も，午前中にどうやら色つけをすませ，午後ブロンズ屋に行ったら，三人がゝりでまだ仕事の最中，四時まで待って出来上ったものを，江波の処に運ぶ。一風呂あびて江波にも来てもらって，院展に四点搬入。銀座に出，江波の処に宿る。

夜，雷鳴驟雨あり。

九月

一日

漆のかぶれで，手はいぼ蛙のようになって居る。朝，家に帰ったら，兄は昨晩中発熱で震へたそうで，床をとって寝て居る始末。それから，保が来る。夕方驟雨。

二日

ぐず〳〵して居るうちに，午前に孝雄〔上原〕さんが来る。八木さんが久しぶりで来る。孝雄サンは一時に帰り，夕方又来て，保チャンを朝鮮にやる為に送ってゆく。そのあとに又，やよひが来る。遅く久顕が帰って来る。これぢゃどうも困る。机に向って落着くことも出来ない。会話は兎角，不愉快なことにばかりひっかかってゆく。漆かぶれは少しもよくならないから，夜は夜で寝られない。これぢゃどうも何も出来ないで困る。

三日

院展入選発表。落選。当り前だらう。午後，久顕サンを引張って，美術院に落選を受取りに行ったら，まだ渡さないのだそうで，受付氏，気の早い奴だといふ表情。それでも車をもって行ったので，特に出して貰ふ。掛りの爺さん曰く，これとこれとはほんとに惜しい事でしたよ，もう少しで入る処でしたよ。随分問題になって居たのですがね。爺さん，有がたうよ。江波の処まで持って行って預って貰ふ。江波が燕楽軒を驕ってくれる。お茶の水まで出たら，丁度夜学がひける頃で，あまり込み合ふので，神田の方を歩く。後藤と新妻君に逢ひ，新妻君と別れ，後藤と一緒に遅く帰って来る。

四日

〔欄外に記す〕
［炬火「6」ニ］

お前粗末な木製の人形よ
私とお前との交情は茲に一年を越えた
譬へお前が――私が台北での或日お前を購ひ
そしてお前は私のカバンの中の旅を終へて
此の一年の日を私の机の上に暮らし
そして今お前は私の机の上に居る
（若しもお前が否定するならば――否）
譬へお前がダクダクツ・サマクの手によって削られ
お前の生蕃風の巻髪と眉毛と
それからお前の瞳と厚い唇とを
固い鉛筆で丹念に塗込められて居るにしても

お前が此処に私のものであり
お前が此処に私の机の上にある所の
恐らくはお前が決して予想しなかったであらう運命を
（若しもお前が否定するならば――否ぞ）
それらは決してその反証たる何等の所以でもない
何故ならそこにお前の隣りに居て
お前の運命の半分を荷って居る
赤面のジャワ人形も亦
彼が此処に私のものであり
彼が此処に私の机に居る所の
恐らくは彼自身の全く予想しなかったであらう運命を
（若しもお前が否定したところで――否否）
それは只々有るべきであった処の
そして今現に有る所の事実なのだ
それともお前の運命は全く他の一人
工人ダクダクツ・サマクの悲しい諦め
数百里をさかれた魂の奥がに
永遠の糸をたぐって居るとでも云ふか？
何故なら私は一人の彫刻家で
私の刻む沢山の彫像がやがて他の一人に購はれ
曽て私の心から産れた所の日本娘が
やがて千里を隔てた金髪青眼の国に旅し
彼処に彼等のものとなり
彼処に彼等の机の上に
お前の運命の半分を荷はうならば
（私の日本娘よ，かたくなに否定せよ）
譬へ其の時それが有るべきであった事実と呼ばれ
そして其の時それが現に有る事実と見られたとしても
否々彼女の運命は当然
千里を隔てた私の悲しいあきらめ
彼女を産んだ私の魂の奥がに
約束の絆を綴ることが決してないか？
（私の日本娘よ，かたくなに否定せよ）
それが今私が茲に想像する架空であったところで
それは彼女に許される立派な権利であり

それは私に許される唯一の儚ない慰めだ
さてさて工人ダクダクツ・サマクよ
此処に私のものであり，此処に私の机の上に居り
更に私との交情を続けるであらう
お前が木で削った粗末な人形は
疑ひもなくお前の奥の奥の魂であり
お前の悲しいあきらめは
おゝ それは美しく報ひられなければならない
そして工人ダクダクツ・サマクよ
そしてお前は快く私の運命の半分を荷ってくれるだらうか!?[94)]

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

暴風雨襲来，但し長くはつゞかない。午過ぎには雨がやみ，夕方には風も止み，夕焼の色が美々しくも物凄い。

五日　日曜日

譬へば工場の時笛
単音のサイレンの
弱々しい永遠の単音がある
弱々しい永遠の単音は
私の感覚を鈍らせ弱める
私の感覚を更に弱め更に鈍らせ
そうして私の感覚は数学的極地に於ては遂に死するであらう
けれども当然の仮定，死の永遠に到達すべき
永遠の時間と永遠の空間のうちに
単音は私の感覚をもっと鈍らせもっと弱め
単音は私の感覚をもっともっと
遂に終りなき無際限の彼方の仮定の死に迄
終ることなくもっと弱めもっと鈍らせ
私の感覚は更に弱められ更に堪へながら
無限の道程を永遠に更に弱々しく
極致なる死に到達する為に，而も決して到達することなく
もっともっと弱々しく永遠の生を生きなければならないだらう
あゝ，弱々しい永遠の単音にもまして残忍な拷問
かくも運命的な運命が又とあらうか
而も亦かくも弱々しい誘惑が，ひよはな生命を

束の間の現実を，永世の星に，暗黒と静寂との
永遠の夜の神秘に結ぶ不思議な約束
弱々しい永遠の単音の足跡に出逢ふならば
それこそは何といふ悲しい慰めであらうぞ
永遠の彼方にはっきりと「ダマスクス」を感じた故に
永遠のダマスクスへの道程を，而も決して彼処に到達することなく
永遠の旅を行き続けなければならない「よその人」が
ストリンドベルクに荷担を求めた時
モナリザの不可知の［永遠の〔欄外に記す〕］微笑がヴィンチに憑いた切那
不可聞の［永遠の〔欄外に記す〕］「叫び」がムンクを襲った瞬間こそは
それこそは何と云ふ悲しい慰めであったであらうぞ

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

嵐の翌日らしい晴爽たる晴天。その上，秋らしい陽が固くなった木の葉に白々と照り，日中はからっとして暑い。漆かぶれは直らない。気持が悪くて気分が勝れなくて，終日家に居ても何もしない。全く何もしない。

六日

ほんとにぶら〳〵して居たら，午後，江波が来た，江波が日暮方帰る前に，小松ひさしが来て，夜十一時までも居る。日暮から雨が止んだり降ったり。

昼間病気〔院カ〕から電報で，フミコキケンスグコイと。兄と母とが行く。大丈夫。だが分娩した子供は流産にはならないように，大きくなって居る立派な男の子だそうで。もう〳〵沢山。それより上，まだ聞き度い人があるなら，お願ひだ，どうか外の人に聞いてくれ。

七日

朝から曇って不愉快で，不愉快で，不愉快で，不愉快で，朝，兄が病院に行ったのに，午後ニハ電報で，ショリデキヌスグキテクレ。英子サンが行く。そして夜，死児が家に運ばれる。さて私は，何をでも聞くのさへいやだから，九時にさっさと床に入って寝てしまったのだから，私は何も知らないのだ。もう沢山，聞かないで居たって，みんな知ってゐるのだから。だが聞き度い人は，外の喋り度がって居る人にでもきいてくれ。だが夜になって，英子サンがアルコールを四本買ってきて，向ふの室で皆で何か，何かして居た事だけは諸君，話しではなくて本当のことだ。そして，久顕サンは苦い顔して玉突に出てしまって，夜中の十二時過ぎまで帰っては来なかったといふのも，本当のことだ。そして此の何日の間，殊に私が不愉快で，不愉快で，不愉快で，不愉快な日を送って居て，私は手のかぶれをのぞいても，神経衰弱，不快症，怠惰性貧□眼眠症等々を新た

に持って居るだらう。自分の事ったら，何一つしやしない。

八日
曇，後晴

九日
朝，小石川へ行き，昼，江波を尋ね，一緒に院展見物，別れて築地に行き帰り，夕食後，久顕サンと松葉へ。

十日
朝から晩まで真暗に曇って居て，それで蒸々と暑くて，決していい天気ではない。夕食後，小石川へ行く。叔母様の処で十時半まで過し，帰りに江波の所に本を返しに玄関口まで行ってくる。

十一日
今日は，父の七年の命日だ。夕方，お玉様が来る。それから自分は大森の山崎氏邸で炬火の小集があるので，少し遅れて出席する。会するもの，川路氏，都築益世氏，能村潔氏，今岡弘氏，倉橋弥一氏，村野四郎氏，それに当の山崎氏と私だった。秋宵漫談を皆で筆記したが，私は一言も言はないで終始黙って通した。
十二時前になって帰ったら，忠久がヂフテリヤで急に発熱して，大騒ぎをして居る始末なので，氷屋を起して氷を買って英子サンの処に行き，一時半に帰って寝る。曇り，蒸暑い。

十二日
晴。午後半日，英子サンの処に行って，忠久の相手をして居る。

十三日
晴。朝起きたら，右の下瞼が心もちはれて居た。午前のうちに，はれが幾分つよくなったので，物貰ひでも出来るのかと思って，硼酸で湿布する。午後になってよくよく見たら，どうも内側の方が大分充血して居る。どうもあぶない。明日の朝までにおさまりそうもないならば，又々目医者に通はねばなるまい。片眼ふさいで居ると，気が鬱陶しくて何にもする気がしない。全く何にもする気がしない。

十四日
晴。蒸々と苦しい程暑い。

朝の中に，慶應病院に行って眼を見て貰ふ。別段の事もなく，只ののぼせのようなもので，多分二三日で直るだらうとの事。有難い。それでも何にもしない。何にも出来ないと云へるかもしれない。

十五日

病院の帰り，中井サンの所を尋ねる心算だったが止めて，新宿で球根と鉢を買って帰ってくる。午後ひどく暗くなって，四時には殆ど真暗になって，篠つくような，流すような雨が降って来る。夜，雨が止んでひどく静かで，蟲の声が急にふえたような気がする。

寝ついたと思ったら，夜中十二時過ぎに起こされる。今度は，忠直[95]が悪いとの事。行って見たら予防注射がきいて居るのだらう。たいした事もない。医者も来てくれる。

十六日

曇って寒い。午後，鎌倉に来る。

十七日

朝から雨。午後，風加はり，暗くて蔭気臭いことかぎりない。あはれでさへある。昌生叔父様が早く帰られたので，午後半日，叔母様も入れて花をひいて遊ぶ。夜，雨風益々はげしく，電気が消えて了ったので，早くねる。

十八日

雨は止んだが，そして朝早く日が照っては居たが，後，終日曇って十一月も末のように寒くて不愉快だ。午後帰京。

十九日　日曜日

曇り，晴れ。朝から江波を尋ね，午後二科を見に出かけようと云って居る所へ宮田が来たので，三人で出かける。ツツーと二科を見て，夕方三沢を尋ねる。

二十日

青田サンに行ってくる。曇日からだん〳〵晴れて，夕方には明るい月が大きい。

二十一日

曇，雨

二十二日

曇，時々小雨。午後，三沢が来てくれる。ヒヨ〳〵と寒くていけない。

二十三日

小雨が霧のように降って，暗くて梅雨時のように鬱陶しい。夜遅く武サン〔土方久武〕が来て宿る。久しぶりで，午後，倉沢が来てくれる。

二十四日

終日小雨が霧のように降って，暗くて鬱陶しくて，不愉快だ。

二十五日

雨は降らないが，暗い，重苦しい朝の後，午後久々で日が照ると，蒸々して，秋と云ふよりは，誠に夏の最後の日のようだ。午後，江波を尋ね，ブロンズ屋に行き，夕方から築地に人形座の公演[96]を見にゆく。そこで久々でやたらと知った人々に会ふ。一番変った会遇は，自分達が学習院の初等科に居た頃の同級生，それから，丁度十六年目で今日逢った，河村邦成だった。終演後，河村と銀座に出て，久々で暫らく話しこんで――遅く十二時過ぎて帰る。

所で人形芝居――いや操人形といふものは，本式には先づ始めて見たと云っていいのですがね。先づ筋がなか〳〵面白いのです。実に無稽なのですね。先づフォックストロットルといふ頑固な親爺さん，成り上り物であり，そして成り上りものによくある形，自分が成り上りものであることを忘れて了ったか，或は成り上りものである故に，そう見られ度くない，或はそんなにも頑固で自己本意に勇敢であったからこそ，そんなに成り上ったともうなづかられるような頑固さを持た〔ママ〕親爺さんに，ゲルタといふいぢらしい，正義の信念に燃える若い娘が居ます。で，第一幕はそのフォックストロットル爺さんの裏庭の石塀の内側で，暫らくの音楽の後に幕が開くと，親爺さんが恐ろしいブルドッグを鎖で引張って居り，ゲルタと散歩がてらといふ形です。ブルドッグは，主人の鎖になか〳〵強硬に反抗する。すると，親父さんは，この犬は実にけしからんといふと，ゲルタは，私だって鎖につながれて，行き度くもない所に引張られたら，この犬のようにあばれてやるわ，だから可哀そうだから，はなしてやれといふ。親父は，とんでもない，この犬を此処の林檎の木に縛って置かなければ，奴等は屏を乗り越しては実を取り，枝を折りやがるのだからな。娘は林檎の木一本どうなったってかまはない，あの人達だって，きっとひもじいから取りに来るのです。親父は，奴等がひもじいかひもじくないか，俺の私〔知カ〕った事ぢゃない，俺が考へて居る事は，此の林檎の実一つ，奴等に取られてはならないといふ事だ。今度取りに来る奴を，死ぬほど此の犬に噛みつかせてやるのだ。そこで親父は，犬を木の裏につないで，娘をつれて立ち去ります。所で，一寸おとしましたが，此の対話の中で，もう一つの事実が説明されるのです。即ち親父さんは，この一人娘に婿を取らせようとして居るので，それも自分に都合のいい婿でなければならないのです。娘は娘で，愉快に一々父に反対します。あ□□（れは）の人は□□□嫌ひだ。次の人よ

りは，犬の方がましだ。その次の人は，猿だ。あの人は，私が好きなのではなくて，此の家と此の庭と，私達のお金が好きなのだ。私は，そんな人と結婚して，町の人達から変な目でにらまれながら此の庭に小さくなって暮すよりは，一生結婚なんかしないで，清らかに過ごす方がいい。親父はあきれて，お□□（男は）前は男といふ男をそんな風に悪くいふが……。そこで，娘は又，反対します。私は男だから悪く云ったり，くさしたりするのではない，例へば，私の知って居る人の中に，本当にいい人を私は知って居る，小さい時に一所に遊んだフランツ，あの人は実にいい人だ，だけどお父さんは，私とあの人とを何年来，只一度逢はせようともしない。親父はプリプリしながらも，結局は自分の考へ通りになる事を信じて居ます。

フランツといふのは，昔親爺さんの成り上らない前の同僚で，今では自分の工場に使って居る，けれど，昔の自分をよく知って居る故に，親父さんが一番けむたく思って居る老フランツの息子なので，やはり工場の職工なのです。

今度は，塀の外にフランツとマックスとが，珍らしい蝶々を追って来ます。蝶々が屏を越えて中に入ってしまふので，マックスとフランツとが屏を乗り越えて入って来ます。所が蝶はつかまらないで，蝶に投げた石が外れて，林檎がばら〳〵落ちます。ブルドッグが出て来て角闘（格）が演じられ，マックスは屏の上に，フランツは遂にブルに組みふせられます。ゲルタが出て来ます。フランツが死んだのだと思って大いに落胆しますが，フランツ自身が，お前の変らない心を見たい為に死んだ振をしたのだと説明するので，ゲルタは飛び上って喜びます。只一つ，フランツが林檎を取りに来たのが気に入らない，がマックスが，二人は林檎とは無関係で，蝶々に引張られて屏を越えた事を説明するので疑は解かれ，二人は結婚を，フランツが此の庭の主人となるのではなくて，ゲルタが町に降りて，フランツの所に行く事を約束します。

親爺が出て来ます。親父は頭からどやしつけますが，娘とフランツとが強硬なので，親父さん，譲歩して条件を提出する，ゲルタを町には行かせない，フランツを此の家の主人にする，そのかはりフランツは，フロックコートを着ることを習はなければならない，エナメルの靴に慣れなければならない，職工達と縁を切らなければならない，社交術を知らなければならない，踊りを踊らなければならない，フランス語を喋らなければならない，きたならしくして働らく事を止めて，気楽に遊んで暮さなければならない。フランンツは，激しく全部を否定します。親父は馬鹿だと罵る。世界中にお前より馬鹿は居ないと云ふ。ゲルタは馳（駆）落するといふ。親父は，ゲルタはまだ丁年に達しないから，ゲルタの意志は自分の思はくに勝つことは出来ない，だが，更に条件を与へよう，即ちフランツが此の世界に彼よりも馬鹿な奴が居るといふ証拠を上げるならば，二人を結婚させる事にしよう。こそ（ママ）でフランツはマックスと共に馬鹿をさがしに世界旅行に出かけます。

面倒臭くなって来たから，簡単に進めます。第二幕一場，フランツとマックスとは，

喰人種の孤嶌で，ムンゴといふネグロ——猶〔酋〕長崇拝の極，自身が猶〔酋〕長に殺され，猶〔酋〕長に喰はれる光栄に浴し得る喜びから，自分がこれから殺されて焼かれる為に，自身で自分を焼く為の薪を拾ひ集める——恐らくは，フランツよりも馬鹿な奴を見つけます。二人はムンゴを無理やりに汽船に乗せて旅をつづけます。

第二幕二場。場面は茲も一孤嶌で，支那の寺院で，愚李丙といふ男が——大変な大金持なのですが——極悪な大僧正の奸計を見□□□□□□透かすことが出来なかったばかりに，全遺産を悪僧正に譲り，自分は腹を切って死なうとするのに逢ひ，これを又携へてドイツに向って帰ります。

第三幕，フォックストロットルさんの室内，第一幕から一年たちました。ゲルタは，猶強硬に親父さんに反抗するので，隣室に閉ぢ込められて居ます。明日はゲルタの満二十一の誕生日なので，明日はゲルタが丁年に達するので，なんでもかでも，今日のうちに親父さんはゲルタの婿をきめて了ふ手はづなのです。

ゲルタの悲歎は云ふまでもありません。そこへ，老フランツを頭に，職工達の一群が青い顔して賃銀値上げをたのんでくる。親父さんは，頑固に之を排ける。職工達は更に更に会議を重ねる為に，一先づ引上げる。親父さんも婿殿とりきめの為，他室に去る。そこへフランツ，マックスの一行が窓から帰って来る。ゲルタも一年振りで窓から出して貰ふ。親父さんは事の意外に吃驚し，約束を無視する。老フランツの一行が又あらはれる。一番の馬鹿であるべき愚李丙が智叡を借〔貸〕すので，一同は親父さんに金庫の鍵を求める。親父さんは，お前達にこれを渡すほどなら，窓外の池の中に抛って了ふといふ。マックスがいきなり親父さんをなぐるつけて鍵を奪ひ金庫を開ける，金庫から出た一枚の紙が，フォックストロットルさんの旧悪の一切を語る。そこで工場は，彼等の所有であり，親父さんは彼等と同じ元のまゝの職工であるべきだ。フランツとゲルタとは，天下晴れて同じ階級の愛し合った揃ひの夫婦だ。親父さんの失意，顛倒を外に，一群の喚喜雀躍は止まうともしない。幕が下りて幕外に一人抛り出された親父さんは，つくゝと自分が世界にも最たる馬鹿であった事を痛感するのです。

後も簡単に書くことにしませう。

私は台湾で支那□□□の人形芝居（芝居の）——これは，糸で引くのではなくて，手で使ふのですが——を沢山見て，その都度面白く思ひましたが，糸で人形を操るのは，又全然別な面白味があると思ひました。

恐らく今日の操り方は，決して□□□（うまい）ひどくうまいとか，慣れたものだとは云へないかも知れませんが——いや寧ろあまりうまいとは云へないと思ひます。けれども又，うまさ以上に面白いものをも多分に持って居ると思ひます。

人形である故の面白さは，人形である故のハンディキャップを持った観方からも来るでせうが，それよりも人形である故の，或は人形でなければならない処の，もっと積極的に観賞〔玩〕頑味□□□（すべき）さるべきものがあるからだと思はれます。

人形ですから，表情は変化しません。が，全く変化しない表情は，又一つの不思議な表情だと思ひます。私達が一番親炙して居るのは，お神楽でせう。なか〳〵面白いものです。更に伎楽，舞楽，能等にお面のすばらしい，立派なものがあります。更にジャヴのお面は世界的なものです。私は他にも，お面を使った露西亜の踊りを見た事もあります。此の無変化の不思議な表情の表情は，確かに特殊なもので，世界各国に古い時代からある事もその効果の特殊であり，大きく強い事を語るに充分でせう。

人形芝居には，プリミチブな感じが附きものですが，そして物語りは荒唐的で，ひとぐ〔どくカ〕非実際的で居ながら，妙に生々しい現実味を持って居ると，いつでも思ひます。或はこのプリミチブネスが，是等の荒唐無稽な物語りやその非実際的な進展をさへ，何処か見たこともない，野蛮な世界の果での現実の□□□□出来事のようにでも感じさせるのではないかとも思ってみるのですが。

このウキット・フォゲルの「誰が一番馬鹿だ」は，誠に筋と云ひ，場面の勝手さと云ひ，人形芝居的で，人形芝居を思ふ様活躍させ得るものだと思ひます。其の上，台詞が又次から次へなか〳〵面白いと思ひました。取り扱かって居ることは，ひどく現代的な労銀問題です。そして茲で作者は，□□□□□□現代思想の一面をなか〳〵皮肉な言葉で見せて居ます。馬鹿も亦相対的なものだ，と。馬鹿も亦不安定な基準の上にぐらついて居る仮定で，馬鹿は亦相互に相対的に，馬鹿自身の位置を上下に転換するとりとめもない概念だと。

二十六日　日曜日

朝□天気よくなる。

午□昼前に，兄と高勇吉の家に遊びにゆく。随分永く〔ママ〕合はなかった。高は少しばかり太って居たが，少しも変って居なかった。一緒に飯を食ったが，相変らず「おっかさん。水！」だ。二時頃辞して帰る。夕食後，駒込の本田サンを尋ねる。本田サンに行って居る間に，一しきり雨が降ったが，帰る頃には雲が切れて，月が出てゐる。

二十七日

終日家に居て，一歩も出ない。

二十八日

晴天，空が秋らしく高く，昼間の間，風が吹いて，頭の重いような日。

二十九日

晴，秋の日が晴れ晴れと照って，空高く青く，雲もない。からっとした風が稍烈しく，明るくて，気が軽い。昼前になって切に外を歩き度くて，高円寺の方を一まはり歩いて

くる。もと田畝だった所，新らしい家に新らしい家が隣って，趣を異にしたけれども，まだ〳〵空地は何処にでもある。薄の若々しい穂が出揃うて，未だ乱れず，風に波打ち日に輝き，姫紫苑，野菊のたぐひ，車前科のたぐひが，思ふさまはびこって，空気は新鮮だ。そこで古めかしい，けれども平凡な真実――閑かな親しい詩でも，幾年ぶりでうたって見たいのだが。

×

空青き
秋の秋日を
ひる前の
陽のきららけく
そぞろ歩けば
薄の穂風に吹かれ
薄の穂日に輝き
穂波うち
まだき乱れず
白がねに
赤がねに
色のなまめき……

うちみれば
秋の　秋日の
空の　青青

×

山桐の
広葉乾きつ
野分めく
風に吹かれつ
裏かへり
靡きなびきつ
ざわざわと
からからと
鳴りのよろしも
日のきららけく

×

かなめ垣の

秋芽あかあか
目のあかるきを

むすめ子の
かざせる日傘
すこし色ばみ――

あけ色の
帯高々と
背に被ひてゆく

むすめ子の
あなみこまかに
すなほこり
かすかに蹴つつ――

ほがらかに
ほがらかに百舌鳥鳴き出でぬ
　×
赤とんぼ
風におされて
疾く流れ
身をひるがへし
風に向へば

風に向ひて
□□□□□
赤とんぼ
風に向ひて
退きつ
少し進みつ
とどまりつ――
　×
青空に
雲もなく
秋の日の

明らけく
穂薄の
若き野べ
広々と
行きければ
ここ天のもと
ここ地の上に
めの犬と
をの犬と
まぐはふに
あひにける
のどけさよ
うららけさよ
　×
青桐の
実の小舟
沢成りて
沢なりに
風に吹かれて

空高く
青く青く
われありて
われひとり
風に吹かれて

青桐の
実は鳴り〳〵
野を行くや
秋日よし
風はかろがろ
　×

三十日
昨日にかへて，暗くて小雨がけぶって，ひどく寒くて不愉快極りなし。

小城のおばさんを出しぬいて，文チャン退院，英子サンの処ニ来て，二階に寝て居る由。

十月

一日

本日，亦天暗くして気息わろし。

二日

秋晴，野分めく風。午後，江波を尋ね，ブロンズ屋ニ行き，夕方帰る。

三日　日曜

快晴，午後，江波来る。共に御祖始様まで散歩。江波腹痛あり，乗合自動車にて新宿に出。江波と別れ三沢を尋ね，夕刻帰る。

四日

晴，朝晩がなか〳〵冷える

朝早く，小城の叔母さんの処に行って来る。

五日

晴，どうも，何にも出来ない。三四日前から，又々目が悪いらしく，本でも読むと，直ぐ右の目に涙がたまる。夜に入って雨。

六日

小雨，後晴，夜ニ入ッテ又パラパラ雨。

〔欄外に記す〕
［炬火７号ニ］

十月の夜が思ふさまひそかな時
こほろぎが庭先に縁の下に鳴く時
私はぢっと椅子の背に靠れて居り
カラジュームの鉢が机の上に在る
静寂が四辺を領し
私は海の日の彼女を思ひ
私は山の日の彼女をふりかへる
彼処の砂浜に波をたたへ

彼処の高原に雲を仰いだ
そうして今や遠く
遠く過去の彼岸にかくれた彼女
かくて現実は去り，現実は去り
彼女は海の日の幸を抱き
彼女は山の日の悲哀を負うて
今や遠く
過去の彼岸にかくれて見えない
而もあゝ，曽ての日の夢のような彼女の存在が
今私と共に生きる姿を見よ
あゝ，曽ての日の夢のような彼女の存在が
今や生々しい抽象となって私に迫り
十月の夜が思ふさまひそかな時
カラジュームの葉蔭に隠れ
静寂を一層深くする蟲の音の中に
ささやく――（今や私は茲に居る
今や私は茲に居り
そうして今や私は知って居る
曽ての海の日の幸がかくもはかなく
曽ての山の日の悲哀がかくもいはれないのを
やがて現実は去り，現実は去り
今や遠く去り行く現実を打越えて
私は過去の抽象の中に生きて居る
そうして今や私は待って居る
やがてお前が彼処の砂浜の幸の波を悲しみ
彼処の高原の悲哀の雲を笑ふであらう日
やがてお前が去りゆく現実を乗越え
やがてお前が過去の抽象の中に
時を越え，望と悔とを越えて
茲に安泰と永遠の私の席を分たう日を
今や私は茲に居て待って居る
私は永遠の抽象の中に永遠の生を生きて居る！）
あゝ，やがて私が此の生々しい抽象
そら恐ろしい永遠の生を
現実の乙女の追憶の中に生き

あゝ，やがて曽ての日の夢のような私の存在が
静寂の中に永遠の抽象と化して
十月のひそかな夜に甦へるならば
否（いいや）　否（いいや）
恐らく現実は去り，現実は去り
そうしてやがて遠く
遠く私は去るであらう
きっと私は死ぬるであらうぞ[97)]

七日

天気はっきりせず，気進まず

八日

終日雨。寒くて，時々火鉢に手をかざさなければならない。午前中に，一寸高勇吉を尋ね，三沢を尋ねて来る。

夜に入って雨，ます〳〵しきりに，まだ〳〵止みそうにもない。

九日

曇後雨。今日より文子さま，当家の二階におやすみになる事になりましてございます。

夜，報知講堂に高の独奏会を聞きにゆく。先づ曲目を見て驚くがいい。第一が，人もあらうに，シュトラウスのソナタ，ヘ長調作品第六だ。ねえ，君，シュトラウスって云ふ人の作品が一つだってわかると思ふかい。こうして第一番から大いにおどかされたわけさ。だがシュトラウスがわからないったって，高の奏いてゐるのを見て聞いて居ると，実に心からの微笑が浮んで来たよ。とんでもない六ヶしい曲をさ，立派にやって行く。否，高其者が実に昔ながらの高で，元気がよくて気持がいいのさ。

第二がフォルクマンのコンチェルト，イ短調作品第三十三。こいつはすばらしくよかったよ。それからバッハの組曲ト長調だが，こいつが又シャコンヌのような無伴奏の難曲で，完全に我々をおどかす底のものなのだ。そうして最後に申訳に四つの小曲（あんまり小曲でもないかも知れないが），ラハマニノフのプレリュード op. 二十三ノ十，ショパン作――クレンゲル編の小夜曲 op. 九ノ二，ドボルシャックのロンド op. 九四，ポッパーの緑繰歌 op. 五十五ノ一だ。新帰朝の最初の独奏会として，厳密な御披露演奏会として，誠に正直に計画された難曲演奏会の観がある。が又，実にそのように高は，堂々とうまくなったのであり，そうして此の最初の独奏会に於て，気持よく人々を酔はせた

とは云へないまでも，立派に人々を驚かしおほせたのだ。高も労れただらうが，我々だって肩が擬った。而も並ならず久しぶりで肩が擬る程驚かされて，身贔屓のわれ〳〵大いに安神〔ママ〕し喜んだ次第だ。

十日　日曜日

晴れ。午後早く，三沢が来てくれる。三沢と上野に独逸展覧会を見に出かけたのだが，相ひにく独逸展覧会の所在が皆目わからない。秋深い午後の日がのどかなので，上野の山をぶら〳〵歩き，野球リーグ戦の速報板を人群にまじって一時見て居る。速報板をはじめて見たが，なか〳〵おもしろい。まあ，一寸人形芝居でも見るようなまぬけさと共に，同時に又無表情の裏になか〳〵深い表情を持って居る。それから，山下へおり，ぶら〳〵歩いて切通しにかかると，明神様[98]のお祭で，なか〳〵賑って居るので，裏から石段を上って境内に入ると，なか〳〵，猿芝居，犬芸から，おきまりの蛇の見世物まで揃へて，人々は雑踏して居る。さて売物店では，□□□□ふしぎに古めかしいものを売って居る。私達が小さい時に，招魂社のお祭やなにかの時，一銭か五厘出しては買ったような，そうして此節では，一寸見かけないような代物が店を並べて居るので，一寸いい気持になった。何とないさはがしさも，何処かにのんびりした気分をたたへ，狭い境内の雑踏の中に，近所の小供達のせいいっぱいのおしゃれ姿も，自ら微笑される。通りぬけて，又通りに出ると，軒並の提灯賑々しく，お御輿がいくつとなく電車通りを狭め，小僧兄哥の揃ひの着附に，おどけた鬘，隅取〔隈カ〕もまじって，わっしょい〳〵わっしょい〳〵。江波の処に行くと，皆々門口まで出て，お祭の行列を眺めて居る。江波の所で夕食。後三人で，本郷通りを歩いてみる。

今朝早く，澄子が自動車もって来，文子さまは目黒におかへりになりました。

十一日

又々曇って冷え〳〵と寒い。

十二日

晴。午後，高の所に行ってくる。夕方から綾様がマリチャンをつれて来られる。

十三日

天気は好いが，終日野分が荒れて，夜に入っても止まない。朝晩がひどく冷えたりする上に，空気が乾ききって埃を立てるので，喉がはれて直らない。鼻汁がたら〳〵垂れてだらしがない。

十四日

風もおさまって，終日天気は静かである。終日家に居たので，夕方一時間程も高円寺駅の方を散歩してくる。総じて秋の夕暮らしい気分は□れ漲って居るけれども，さて格段の何の刺戟もない。

十五日

朝から曇って，終日暗くて，雪でも降って来そうに寒く，小雨がぱら〳〵と降って来たり，くしゃみが三つ四つ，続けざまに出て見たり，誠に気持の悪いうす寒い日だ。

十六日

朝から雨。今日の新聞に詩話会[99]〔解〕開散の報告文が出たと思ったら，九時過ぎて，炬火から重要な協議があるから大森の山崎君の処に集ってくれと云ってくる。で少々面〔倒〕当にも思ったが，指定の一時に山崎君の処に行く。三時頃から夕暮まで碌人碌語の合評を続け，夕食後，相談に移る。つまり，詩話会〔解〕開散に付いて，日本詩人が廃刊になる。そして，今度は同人雑誌の割拠時代が暫らく予想される。そこで，炬火も今迄のようにおとなしくして居ないで，もっと積極的に出張って行かうと云ふこと。それには，内容をもっとジャーナリスチックにすること。組織を対外的に多少変へること。及びそれについての経済的な準備の相談並びに庶務的な役割の予定などだったが，結句，山崎君の主張の基準に多少の改正を加へて，同人を四人乃至三人に減じ（実力――社会的実力に依って資格を厳にし），経営同人を一般社友から別けて，十人内外定めて，事務及び多少の経済的特殊の負担を引受けて貰ふ事にし，十一時に山崎君の所を辞したが――処が，山崎君をのぞいた他の総べての人々が，これに反対なのだ。又その訳だ。何故と云って，これは結局第三人称的立場の人が，経済的に立てる雑誌経営法で，同人の同人たる□□□所以が全く無くなるからだ。だから，今日の相談は，恐らくはまるでまとまるまいと思はれる。雨止む。
〔欄外に記す〕
［社会的作家の□寄稿を云ふことといふやつが一番いけないらしい。つまり，同人級の作家の寄稿が堂々と紙をとって，経営同人がこの紙を寄付して居て，自分達は三段組にごっちゃになって居るのでは，如何にも人がよすぎる筈だからだ。］

十七日　日曜日

朝からどんよりと曇って居たが，石膏屋が来てくれて，昼過ぎまでかかって帰った頃から，情けない秋の薄陽が差しかけた。

十八日

晴。佑サンが昨夕帰ったと云ふので，朝のうち一寸行ってくる。夕〔方カ〕食散歩して帰ったら，

佑サンの所から夕食に呼ばれて居たので，御馳走ニなってくる。風邪がちっともぬけないで，鼻がつまって，物がまづくて，根気がない。

十九日

晴。根気がない。何かやたらとしなければならないような気がして居て，何にも出来ない。午後，江波が来てくれる。

二十日

快晴。午後，江波と帝展を一廻りのぞいてくる。益々興味がない。若い人々は，みんなうまい。先生達のを見わけることが六ヶしい位みんなうまい。どんぐりの背くらべと云って失礼ならば，大どんぐりの背くらべでもいい。斯うも若い人達がうまくなってしまっては，万歳だ。だが，万歳は行きづまりだ。現にこの中で特選になった諸氏のものも，特に選ばれる程一般からづぬけられないのだ。中のあるものは，特選の札をまちがへて隣りの彫刻につけてしまっても，それでも誰も敢て気づき，敢へて不服を云へないような所だ。先生方のうちのある人々は，昔の中にめりこんでしまったようだ。石川確治，後藤良等等，そして昔の中にめりこまない人々は，どうやら若い人達の□□（中に）レベルに落ち込んでしまったようだ。理想は到達された。そして，到達された理想は，明日腐れ落つべき現実だ，過去だ。

詩を持って居るのは，小笠原貞弘一人だ。ナチュラリズムの中にひそやかな詩を見つめて居る人には，加藤鬼頭太，国方林三等，二三の人々がないでもない。→

感覚の新鮮な人が又殆ど皆無だ。

洋画と日本画とは室から室へぬけて，空気だけ吸って来ただけだから，何か云ふまい。

夜は江波と銀座に出る。

二十二日

晴，朝，初台に倉橋弥一君を尋ねたが，留守だったので神田に出て，絵具だの本だの買って，午に家に帰る。

→昨日は，終日家に居て何もなかったから，昨日のうめあはせに，も少し帝展の悪口？でも書く事にする。帝展の彫刻は，□□□□□□□（大きな意味では）たった一つだ。曰く，外面。一体いつまでこんな素朴的実在論のスナヲな無智の中に，ぶか〳〵と漂って居るつもりなのだ。十九世紀の科学の急進が，唯物論的な思想を渦巻かせたのは，誠に当時に於ては当然でたった〔あカ〕。だが唯物論的機械観からは，芸術は絶体〔対〕に産れる筈がないのだ。（唯物論的機械観の前には，芸術は全く意味なきものだ，芸術といふ言葉さへ，たわいのない空虚だ。

唯物論的目的観の前にさへ，芸術は工芸以上の価値を持ち得ない筈だ）譬へ諸君が彼の偉大なるロダンから，お前が云ふ外面（写実的手法）を学んだのだと云っても，待ち給へ，ロダンには，［現実即実在的な〔欄外に記す〕］，実在至上的な信仰があったのだ。だから，ロダンは鼻かけを作って得意だったのだ。そしてそれは又，実に大きな意味でもあったのだ。処が，ロダンも又其処に絶体〔対〕的な満足を得られないで，技巧至上的なものと，及び彼のあくどいロマンチシズムに走ったのだ。

処で，諸君と来たら，自然に対する何等の信仰もないくせに（若し君等が己は自然に対する立派な信仰を持って居ると云ふならば，私は云ふ，諸君の持って居るのは信仰ではなくて，伝統的な概念とぬけがらのような教へられた宗教だと），外形にとらはれて，自ら縛して得意になって居るのだ。

ゴシックに還れ，更に奔放にさへ思はれるアルケイックこそ，君等に尽きざる興味を送ってくれるだらう（若しも君等が概念を――技巧的な，美学的な，伝統的唯物論的な，概念をすてて素直な感情と教へられざる，寧ろクルードな自己の内的欲求，生命を省るならば。）帝展の彫刻には（私は断言する），精神的なる何物もない！ 此の意味で何か非物質的なものを持って居るのは，柴田正重氏だ。

私は偶然，皆の使って居るモデルをかなり知って居る。成る程，よく出来て居る。ハハア，あのモデルだな，と。だが何のことはない，そこには彫刻はなくて，モデルの影が立って居るのだ。彫刻と云ふものは，絶対に彫刻でなければならないものだ。僅かばかりのポーズの差異，僅かばかりの型式の差異，そんなもので彫刻の上下が別たれるべきではない。目的乃至完全の概念が唯一つであったルネッサンス時に於てさへ，偉大なる画家ミケランジェロとラファエロと，ダ・ヴィンチとは，明らかに犯し難く異なって居た。それだのに，個人意識が殆ど完全にさへ自覚されたる今日，隣りの彫刻と，作者名と題名とを取りかへられても，何等の苦情をも感じないようなものをならべて居るのでは，「これこそは我輩の作である」とは言ひ得ないだらう。

ロダンが教へたのは，結局外形も――外形其物も亦芸術の立派な一分野であり得ると云ふ事だ。帝展の彫刻には，此の一分野しかないのだ。譬へそこに僅かばかりの形式【装飾的効果】と，僅かばかりの趣味とロマンチシズムとがあるとは云へ），此処には，精神的なる何ものもない。更に，超自然的な，或は自然無視乃至軽視的な意志的な創造的な分野が全く欠けて居る。まだ〜全く別な，そして寧ろ，より優れたる一分野或は二分野がある筈である。私は一分野を否定するものではない。けれども，優れたる他の分野を措いてまでも，一分野□□□□□□□（のみを以て彫刻）（否，一時流行した――而も最近に流行した故に――今にして見れば，最も範囲の狭い）のみを以て彫刻そのものの価値を限定し，低下して居る理由を認める事が出来ない。物質よりも精神を，量よりも質を，形式よりも気分を，うまさよりも味を！ だ。

二十三日

晴。

イソチャン。アナタガタノ楽シミノ最中ニ，ヨク私ニ葉書ヲ下サル事ヲ忘レマセンデシタネ。トコロデ，私ノ知リ度カッタノハ，山ミチモ労レナカッタコトヤ，十五夜ノ月ノ光ガ山ノ線ヲハッキリトエガイタコトヤ，大変寒クテ，湖水ニ輝イテ居ル月ノ姿ガ，ツメタク思ハレタコトデハナクテ，ネ，レーキサイドホテルガビックリシテ腰ヲヌカシハシナカッタカドーカ，アナタガタノアリアマル勇気ガ，先生方ノ注意ヲ引キ過ギハシナカッタカドーカ，ソレカラ勇気アルヨワムシ達アナタガタガ，風邪ヲ引キハシナカッタカドーカ，チョコレートヤビスケットヲ飲ミ込ミ過ギテ，オナカデモ悪クシハシナカッタカドーカ，引イテハオ家ノオ父サマオ母サマ方ガ心配ナサルヨウナ結果ニナリハシナカッタカドーカ，アナタガソレトモ山ミチヲノボリナガラ，ケゴンノ瀧ノ白イアブクニ熱狂シナガラ，ソレトモ紅ヤ黄ニ美シイ紅葉ニウカレナガラ，アルヒハ中禅寺〔湖脱〕ノ静カナ水ニ照ル月ニ我ヲ忘レテ「バンザイ」ヲ叫ンダカドーカ，ト云フコトナノデス。エ？ホテルハ地震ノヨウニユレタケレド，幸ニシテ倒レナカッタッテ？　ソレハ第一ニ結構。エ？　アナタガタノアリアマル勇気ノ為ニ，先生方ニハ途々シカラレ通シダッタッテ？　ソレモマアヨロシイ。エ？　勇気アルヨワムシ達，□□□□（アナタガ）ワタシ達ハミンナシテ立派ニ風邪ヲ引イテシマッタッテ？　ダカラ云ハナイコトデハアリマセン。エ？　食べ過ギデオ腹ノ中ハデングリカヘリ，ワタシハオナカヲオサヘテシカメッツラヲシテ，途々ノ愉快ヲ半分ニヘラシタッテ？　ソーレゴランナサイ，トシヨリノ心配スルコトハ，次カラ次ヘトアタッテユクモノデス。エ？　デモ遂ニ中禅寺〔湖脱カ〕ノ青イ水ヲ見タ時ニハ，「アナタハ」思ハズモバンザイヲ叫ンダッテ？　ソレハ何ヨリデシタ。何故ト云ッテ，バンザイヲ叫ビ得ルモノハ，何時ダッテ幸福ダカラデス。ナーンテ少シバカリ象徴主義的デスネ，ミットモナイカラコノヘンデヤメニシマス。

秋ノ夜ガ変ニ静カデ，イツカ見タ中禅寺〔湖脱カ〕ノ重タイ水ガ頭ノ上ニノシカカッテ来ルヨウナ夜，高円寺老爺ノ手紙ハコレデ終リマシタ。

二十四日　日曜日

晴。朝，金沢庸治君を尋ね，午，江波ヲ訪ね一緒にブロンズ屋に行き，夕方帰る。留守に倉橋君が来てくれたそうで，手紙が置いてある。炬火改革に対する川路氏ノ意見として

一，雑誌名は少し考へさせてくれ，“炬火”の方がいいと思ふから。

一，幹部は設けても，設けなくともよい。

一，同人，社友は現在のままであった方がいい。

一，山崎君のジャーナリズムによる計画は実行不可能なことがあるから，見合はせてもらひ度い。
と。そして，近日もう一度会合協議がある由。

二十五日
晴。夕方散歩。

×貸屋〔家〕札小さく貼りし門のうちに紫苑乱れたり紫苑は優しき
×印度杉の幹にこもかけ秋遅き医者の玄関のひそまりにけり
×花沢といふ人の家の庭先に大き菊植ゑて傘着させたり
×薄野に風稍々わたり入日空千色に染みて澄みとほるなり

二十六日
晴。朝，小石川へ行き，午後，田端に倉沢を尋ねたが，留守なのでブロンズ屋にまはり，江波の処に寄って，四時頃帰ってくる。

二十七日
×わが菊の今は盛りとこそゆせ見せまし程のものにはなくにわが菊の

二十八日
雨。寒くて寒くて，此のしばらく毎日のどかな日に，ゆるんだ心もたちまちぴっちゃんこ。夜は八時といふに，床の中にもぐりこんでしまふ。

二十九日
✓かぶりては何かつぶやきかぶりては何ぞつぶやき柿食ふ音枝[100)]
✓言しげくつばふふみつゝ音枝ばばが柿食ふみれば鳥に似たり
✓渋きぞうまき渋きぞうまきと渋柿をかぶる音枝を見ればしぶきぞ[101)]
✓喜びあまりつば吹き語り渋柿をかぶる音枝にたぬしさは尽く

朝まで雨が降って居たが，止んで後，終日どんよりと曇って寒くて暗い。こんな日には，何一つ出来やしない。こんな日には，昔の中にでもめりこんでしまふのが一番だ。だから私は，源氏物語を出して読んで居る。薫の君のあげまきのくだり辺から，浮舟の君の辺まで，ぽつりぽつり読んで居ると，夢でも食って居るような，紙一重向ふの出来事を，

ほのかに見透して居るような気持になる。早く日が暮れ，夜が馬鹿に静かで，こほろぎの声も遠く一つ二つ聞こえるかと思ふと，聞こえなくなって居る。

三十日

佑さんと築地小劇場に行く。アンドレーエフの「横っ面をはられる彼」[102)]

三十一日

朝，江波を尋ね，一緒に倉沢の所に行く。三人で出て砥石だの，のみだのを倉沢に買って貰って来た。木彫といふ奴を始めようってんだが。何だかうまくゆきそうな気がして居るんだが。

銀座で飲んで，歩いて遅く帰ってくる。

十一月

一日

晴，午後，倉沢を訪ね，江波の処にまはり，夕方帰ったら，築地から速達が来て居て，吉田ノ謙チャンが会ひ度いからとの事なので，食事後，築地に行く。丁度，築地では，仮面座が第一回の試演をして居たので，中途からのぞいて来る。チャペクの「マクロホウロス家の秘法」といふ奴で，作も面白くないが，何としても役者が下手なので，或は下手な人が居るので，時に馬鹿らしくて笑ひ度くなってしまふ。まだ〳〵金をとって見せる芝居には大分遠い。

二日

晴。朝から明治神宮競技を見にゆく。帰に三沢の処に一寸寄る。

三日

晴。朝から佑さんをさそって，明治神宮競技を見にゆく。

四日

午後，築地に行く。日暮前から急に雨が降って来たので，今度上演する創作物，中村吉蔵氏の大塩平八郎の舞台稽古を見て，晩になって了った。遅くなりそうなので，中途で帰ってくる。

五日

晴，午後，倉沢の処に行き

六日

晴，風烈し。午後，倉沢の処に行く。

○私達の船は南へ南へと走って居ました

私，ベッドの上に寝て居たのです

私，今ひょっと思ひ出したのです

×

○私達は蛙を食べながら，五加皮酒を飲んで居ました

幼仔(ユーワ)は琵琶をひいては南方の歌をうたひました

一くさり毎に林(リン)さんが悲しい恋物語を説明してくれたのでした

×

○トーシャ（人力車）を降りたのは夜中の一時でした

博覧会場は明るいままにしまって居ました

大王椰子の並木道で林(リン)さんが私を呼びました

「幼仔(ユーワ)が，あなたいつまでこっちに居るか聞いてくれって云ってます」

×

○通りからぢかに暗い階段を昇った室でした

「大変小さい」と日本語で云って（真夜中でした）

幼仔(ユーワ)は琵琶を置いて皿の上にパパイヤを割りはじめました

×

〈 〔欄外に記す〕［93頁ノヒトツヲココニ入レル］

○お寺は山ふところの高い石段の上にありました

七かかへの古杉の幹は朝霧にじっとり濡れて居ました

私はいつか深いひだの通ったその皮を一枚一枚むいて居たのでした

×

○まきは別当の娘でした（私は子供でした）

まきがお嫁にゆくお嫁にゆくと云ってお嫁に行ってから

そう，かれこれ十五年になります

○そう，

私の心に靄がかかって居たのです

私，真面目になってそんな事考へたのでした

×

○いやに硝子戸の多い街でした

歪んだ私の姿がいやに気になってね

私，笑ってるつもりがつひ涙もろくなって了って――

×

ここは気のおけない片隅

私

こんな隅っこが好きです

×

○海が青くていやに静かだったのです

それでＤのお嬢さんですか？

何でもないのです，気まぐれな芝居だったんです

×

○蓄音器をきいて居たのです

そしたら急にあの女は泣き出したのです

いやなことです，私解（げ）せない顔して居ました

×

○鏡屋の店ででしたよ

沢山の死んだ私のかけらを見たのは

蒼ざめて，いつになく綺麗になってね

×

○あの女は世の中に自分程不幸な者は無いと思ったのです

で，いつのまにか自分で不幸を意識する事を楽しんで居たのです

で，とう〳〵少しでも楽しそうに振舞ったり笑ったりするのを耻にして了ったのです

×

○雪どけの場末の街のぬかるんだ道にそのバーはあるのです

ここの子供っぽい女主人に若い男は集るのですが

ルルのような女達がその若者達をなぶってなぶって了ふのです

Ｋはそう云って淋しく笑ったのでした

×

○それがあいつの手段（て）だったのですね

世の中はうまく渡らなくちゃと常々云って居たあの男の――

そして私は正直を通りこした馬鹿だったのです

×

○あの男はいつだって「今に見ろ」と思て〔っ脱カ〕居たのです

自分を亀のこのように思って今に見ろ今に見ろってね

ですがあの男は死ぬまでそう思って居たのだから偉いものです

×

七日　日曜日

雲が多いけれど，どうやら晴れて居る。朝から倉沢の処に出かけ，三時までかかってノミの柄をけづる。帰り，江波の処により，江波と燕楽軒でビール，寒くてやりきれない。

八日

晴れ。朝，江波を尋ね，一緒に独逸展覧会を見にゆく。少し寒いけれど，自分には仏蘭西美術よりも親しみがある。絵よりも彫刻になか〳〵いいのがある。焼物は概してひどく趣味が悪い。工芸品の中には，悪趣味のものと，面白いものとがちゃんぽんにある。江波と別れて，美術学校に行く。倉沢が待って居てくれる。今日はノミの歯つけだ。

九日

晴。

十日

晴。倉橋君が来て，昼まで話して行く。午後，一寸佑さんが来，晩，珍らしく江波と三角が揃って来る。松葉ニ行く。夜，雨になる。

十一日

雨。午前中に慶應病院に行ってくる。

○論理的？
　二つの思想，二つの意志がもつれる時には
　一般的には「論理的」に強みがあるようです
　　×
○形式？（勿論狭義の意味ですね）
　形式は絶対に詩ではありませんが
　効果に就いてなら歴史的事実が喜んで証人になります
　　×
○非論理的？
　印象主義的には破綻を呼びますが
　一切の超自然的なものは此処から産れます
　　×
○えゝ，超論理的迷信は□□□（一つの）立派な力ですが
　論理的に統整（ママ）練磨された宗教は

信仰の積極性を失った自縄自縛です

×

○遊戯ですか？

底に構へたものが見えすいては鼻もちがなりませんが

純情自由な遊戯は最も愉快なものの一つです

×

○それでは基準はどこにあるとおっしゃる？

基準は社会性をはなれることが出来ないもので

酷く云へば自らなるべき価値を限定するのは冒黷〔ママ〕です

×

○統一がないとおっしゃる？

へッ，感情は対称の転換にゆらぐ

誠に弱腰のコスモスでございます

×

○準拠の確定が無いとおっしゃる？

不動は醜態を庇ふ外套

真実の飛躍を怖れる退屈な城壁です

×

○絶対機械観は悲劇主人公の諦観でして

(悲劇主義に陥ったらば又機械観からは離れます)

感情的積極の前には論理を越えて無意義です

×

○処で現象即虚無といふ奴は論理的一考察ですが

詩人は虚無の中にも立派な縦と横とを見ますし

虚無思想は必ずしも積極主義を萎えさせません

×

○或る男が髪の毛を引つかんで「虚無だ，虚無だ，虚無だ」と地団駄をふみました

「だが所詮，骸骨の俺が進み出て踊ったら，又自他共に愉快ではないだろうか」

そこで彼は進み出て勇敢に踊り，踊って云ひました

「生活することには何やら窮極からは予想されない価値がある」

×

○目的観ですか

目的が感情的に肯定されて居る間は大きな力ですが

論理的にのみ攻究され概念づけられた時，死んで了ひます

×

○出鱈目だとおっしゃるのですか？
　出鱈目は最も愉快なものの一つですし
　其の上出鱈目も亦人格の深浅に並行する味を持つものです
　　×
○意味ですって？
　あなたの意味は外面的経済的価値を暗示する意味なのですね
　処がもっと高い意味は詩的なものの中にあるのです
　　×
○達する？
　とんでもない，道程の終りは死ですよ
　永遠の生命は永遠の道程ですよ
　　×
○懐疑は終りなき道程を得る唯一の鍵です
　懐疑は第一のものから第二のものを産む母です
　懐疑は個定と常住から逃げまはる生命活動の本質です

十二日
晴。

十三日
晴。午後，三沢，村田が荒居の徳サンをつれて来て，夕方まで麻雀をして遊んでゆく。

十四日　日曜日
晴，風烈し，午後，江波を尋ね，ブロンズ屋に行って，夕方帰る。

十五日
晴，昨日からの風が少しも止まず，荒れて，空気が急につめたくなって，寒くて肩がこって，頭が重い。これから冬中，こんな日が多いと思ふと頸がちぢまる。

十六日
晴。寒さがめっきり益〔ママ〕す。中井の良さんが昼前から来て，夕方前まで話して行く。

○垣根うちの椎の木が夜の雨でひた〳〵と濡れて居ました
　静かな秋の朝日がその椎の木につや〳〵と光りました

あゝ，そんな朝でしたよ，私がちょっとあまへたい気になったのは

×

○きみ江さんと私とは短い間のいいお友達でした
夏の夜を月があっても無くてもキャナルへ行っては足をなげ出しました
きみ江さんは九州に帰って多分嫁いだでせう，多分いいお母さんになったでせう

×

○そこで私はその女に云ってやったのです
――私はだん〳〵他人(ひと)のことに実(み)がいらなくなってゆきます
よくゆけばあたりまへで，わるくいったら大変なのですからね

×

○月はありませんでしたし星も少なかったので
淡水河の向ふ岸は真暗でまるで見えませんでした
館の下の所だけゆるやかな流れにほのかなあかるみがさして居ました
←［86頁ニウツス］

×

○気の毒な人間が居るものだと思ったよ
気取られまいとして笑ふのだがね，うまく笑ってみせるのだがね
その男が笑へば笑ふほど僕の心は泣けて了ふのだ

×

○通りすがりにちょっと夢を見て居たら
おやと思ったが僕の洋服
左腕二の腕の上に五分ばかりの鍵裂を見たっけ

×

○僕はけんかにはさせなかったよ
僕はそいつに云ってやったのだ
「多分君の云ふのが正しいのだらう」ってね

×

○あの男は自分に云って聞かせるように僕に話したのだ
「あゝ，あの女は僕の全幸福だった
想像なんかするな，君の想像は倒〔到〕底僕までは届かないのだから」

×

○その晩は雪が降って居た
僕は明るいカフェーの前に長いこと立って居た
だが何故かとうとう思ひ切って中に入れなかったのだ，何故かね

×

○曇って寒くてお堀の氷は一日溶けなかった
　だが僕は夢を見て居たのだ，夢をだよ
　ヘッヘッ，あったかい夢をね

十七日

終日曇って寒くて肩がこって，頭が重くて体がちぢこまって気があがらない。午ごろからは，ぱら〳〵時雨れて，夕方には一時雨らしい雨さへ降って，いやな日。

十一月の夜が
雨になった
冬になる
季節の雨――
時色の菊の花群が
琉球焼の
金魚模様の壺に
静かに――

魂も
冬は寒いか
ふところの奥に縮まった
縮まって寝た

無精な魂
遅夜のチャルメラを
ねむりねむり
無感覚に聞いてゐる

十八日

朝がなさけなく曇って寒かったが，一寸日が出て後は，再び夕方まで曇ったが，静かで暖かかった。夜，築地に行く。十二時に帰る時は月があかるく，空気が冱へてめっきり冷えて居る。明日は霜でも置きそうに冷え〳〵する。

劇場では，中村吉蔵氏の「大塩平八郎」[103] 五幕をやって居る。観客が馬鹿に少ない。こんな芝居に，こんなに観客が少ないのは何故だらう。多分，民衆はいつだって，いつまでたったって民衆なのだ。だから私は民衆が大嫌ひだ。だからと云って，上流貴族か？

貴族は貴族で，いつだって，いつまでたったって，社会的貴族であるばかりなのだ。これとそれとが人間なのだ，と云ふなら私は知らない。私は非人間的な人間なのだらう。それなら，私は非人間的な人間を主張する。精神的で，自由で，概念――何等の意味での概念をも踏みつけて，詩的に，高踏的に――（現実とロマンスととをごっちゃにするのではなくて，反対に社会的現実と自己の詩とをはっきりと区別することによってのみ，社会的現実的拘束の中に，精神生活を樹立し自己の内的生命を傷けることなく事実を，現実的社会を肯定することが出来るのだ）――純情を開発して行く人間である。築地小劇場が蒔いてゐる種は多分，大塩がぶちまいた小判なのだらう。大塩がぶちまいた小判は，民衆から恐れられた。民衆は芝居を愛するのではなくて，劇場に行くのが好きなのだ。或はもっと悪ければ，変質した民衆は，観劇組織の簡単は演劇の粗末を，観劇料金の安価は中〔ママ〕実の無価値を暗示するもの位ひに思って居るのだらう。

無理もない。民衆はいつだって，いつまでたったって民衆だ。（ここでは社会的貴族も亦立派な民衆なのだ）気のぬけた民衆は，自分で自分のものを選択する自由を恐れて居るのだ。無気力な民衆には，自分で自分の嗜好を見出す程の力さへないのだ。

私は大塩の陽明学の講義と倫理的なものへの情熱，並びにその信仰に対する実行意志からは寧ろ遠いものだ。それにもかかはらず，此の長たらしい芝居を興味深く見た。

偶然築地で久保氏の訳したトルラーの「解放されたウォタン」を買って，帰りの電車の中で，帰ってから床の中で，一時半までかかって読んだ。

ここにも平八郎の夢と彼をとりめぐる民衆とがある。けれども，トルラーは既に「群衆――人間」，「機械破壊者」に於て，平八郎の悲痛な落胆を経験し，民衆の民衆たる所以を知った後だ。だからここでは，シュライムによって，民衆は頭〔ママ〕まから愚弄されて居る。それならば，何故トルラーは，三度まで此の幻滅を書いたのだらう。

而も今度は頭から此の理想を茶化しながら，而も前よりも更にいい気持になって，更に荒唐的に書いたのだらう。多分夢は――□□□□（僻へいつ）譬へいつだって，いつまでたったって夢であったって――夢はいつだって，いつまでたったって美しく快いからではないだらうか。

さて，私は民衆を嫌ひ過ぎたかも知れないな。何故と云って，私だって民衆を知って居るぞ。民衆は金を出して横面をはられて，喜んで笑ふのだ。「日常」に飽きた心はそんなにまでなるものだ。［〔欄外に記す〕と云ふ意味は，現実□□□□□□（に倦んだ心が）的拘束に虐げられた心が自ら卑下してしまって，非現実の夢の中に，彼等の精神生活が絶対自由であり得ることを忘れて居るのだ。］相手が芸術であらうがなからうが，民衆にとってはどっちであったって，無くったって，ちっともかまひはしないのだ。だから芸術家よ。芸術をかひかぶる事勿れ！　民衆が各種の芸術と色んな形で色んな風に結びついて居るのは，それはほんの偶然なので，［〔欄外に記す〕（つまり芸術の本質的価値の為にではなくて，傍系的興味の為なのだ）］。芸術家よ，君達が芸術に見出だした必然とか絶対とかは，只只君達にのみ係はり，只只

君達にのみ価値を持つのであって，ね，芸術家諸君，民衆はいつだって，いつまでたったって民衆なのであって，民衆はいつだって，いつまでたったって芸術家ではないのだよ。解るか，価値は決して普〔遍〕的共有性を持つては居ないので，価値は又一つの個人的創造なのだよ。

それにしても，気力のない民衆よ。何故他人の価値の中に自ら縛られて，自ら卑下し，自ら死んで居るような馬鹿らしさを敢てするのか。他人の価値を，せめては一応疑って見るだけの権利さへないと思ってゐるのか？　民衆よ，尊大であれ，自己を可愛がれ，自己の価値を創造せよ，築地小劇場に行け！　さて，築地小劇場よ。お前の芸術の理解者を民衆に求める程よりは，お前の芸術の価値を民衆に強ひる程よりは，幕を下せ！　幕を下しても決して芝居は亡びはしないであらう。いいや，幕を下して後にこそ，君等が創造する価値は断固たる価値となるであらう。君等の芸術は，自由の世界を存分に翔るであらう。これは皮肉に聞えても，決して皮肉ではないのだ。

十九日

晴。夕方から風立ち，夜に入って風荒し。

私の薄暗い部屋
ひっそりとした——
外
硝子戸の外に十一月の月が冷たく昇り
月の光が彼処の屋根に青白い光を照り返してゐる
月よ，お前の姿よ
月よ，何と冷たい——
冷たく正しいお前の運行よ
私は見たことがない
お前が少しでも暖かかったのを決して見たことがない
お前が少しでも自由だったのを決して見たことがない
お前が一度だって礼節を失ったのを
お前が一度だって喜び又悲しんだのを
いい〔否〕や，一度だって反抗したのを！
お前はいつだって東からはじめて空高くかかり
やがて西に降りて闇を行く
お前は只ほんの少しばかり
ほんの少しばかり赤いか

ほんの少しばかり青いか
或はほんの少しばかり黄色い
お前は何故真赤にならうとはしないのか
お前は何故真青にならうとはしないのか
何故めくらむ黄金に焔えようとはしないのか
お前が運行の掟を尊ぶのか
運行の掟がお前を虐げるのか
とまれお前の運行の正しさ
とまれお前の運行の冷たさ
お前の運行のおごそかは私をうちのめす
お前は常にゆっくりと進み
お前の進みは私にはわからない
そうして，そうしてお前はお前のおごそかな運行を続け
そうしてお前は退屈な永遠の前に私を恐れしめる
それとも私は「暫らく」のものである故に
私は永遠と永遠の約束に就いて
決して決して知ることがないのであらうか
お前は闇から昇って闇へと降り
自らの光によっておほらかな半円をお前は照り
自らの運行に従って蔭なる半円の中にお前は見えない
そうしてお前の表情は静かで
そうしてお前の表情は動かず
私にはお前の感覚がわからない
お前の動かない表情は私を苛立て
お前の蒼ざめた無表情は私を怒らせる
お前のおごそかな半円は掟の前に私を狂はせる
それとも私は「暫らくの気まぐれ」なものである故に
私は掟と掟の超感覚に就いて
決して決して知ることがないのだらうか
とまれ私は倒〔到〕底「永遠」なるものではない故に
私は熱を愛し
礼節は私を被ふに不完全である
私は自由を嘉し
私の感覚は率直で露骨である
私は望み，私は実行する

否(いいや)，私は断然反抗する！
月よ，月よもっと
もっと赤く，もっと青く
否(いいや)，只一度めくらむ黄金に焼けただれ
焼けて怒れ
□□□狂へ！(乱せ！)
外には
十一月の月が中天にかかり
私の部屋はひっそりとして薄暗い
何ものも変らない
何ものも変らないが
多分月は私を聞いただらう
いつか私は月が会釈するのを感ずるにちがひない[104)]

二十日

晴。午後，倉沢を尋ねたが，留守だったので，江波を尋ねる。帰りに三沢を尋ね，夕方帰る。

二十一日　日曜日

晴。早昼を食べて築地に出かけたら，暫らくして三沢が来た。
帰りに三沢と銀座を歩いて，お茶を飲んで夕方帰ったら，田辺サンが来て居られた。

寛ちゃん。帝展に就いての感想を君は求めて居るが，大分前に見たことだし，君も承知して居る如く，僕は帝展に対する親切気をいよ〳〵抛棄して居る今日，僕はもう例へ君にでも，今更細々と書いて送るだけの元気がない。だから僕が日記□□□□(に書いた)（十月二十日と二十二日に）に書いた，断扁(〔ママ〕)的な総括的な感想をそのまま送ることにする。これでゆるして貰ひ度い。

ただ茲に，君等が君等風にモデルを使って居ることに就いての僕の考へを，一寸つけ加へることにする。

彫刻に於て所謂モデルを使ふことは，割合に近代のことであって，自然主義的な主張の上に，自然主義的な研究法として始まったのであるが，にも拘らず，現在では既に其の意味が色々に変って来て居る。つまり一般的には単に感覚の対称とか，或は極めて無造作に常識的に或る程度の写実を――或る程度の写実的根拠を必要とする為の常套的な階梯としての，かなり外面的な一つの法便となった如くである。が，更にそれにも拘らず，

一般には漠然とこの伝統を，恰も絶対的に権威あるものの如くに考へられて居る如くである。けれども，自□□□□□□□□然（処が僕としては）の一断片としてのモデルを使ふことの本質的な目的は，一つのものを徹底的に洞察することによって，其の深奥に潜む所の普遍妥当なるミクロコスモスを得んとする所の，自然哲学的な精神からなのである。即ちこの法方（〔ママ〕）の依て意味づけられる所のものは，其の準拠として実在論（外形的な，あまりに外形的なものにかかづらって居る所の，現在の帝展の状態から察すると，寧ろ粗（〔素〕）朴的実在論と云った方がいいだらう）を信奉すると云ふことが，前提されなければならないのである。

処が僕としては，絶対的には実在を予想することは出来るけれども――即ち絶対客観的実在を只其の存在としては肯定することが出来るけれども，一度それが我々と云ふ主観の対象となるに及んでは――即ち我々の意識の内に把住（〔握カ〕）せられる所の写象（〔ママ〕）となるに及んでは，倒（〔到〕）底観念論的にならざるを得ないと考へられるのだ。

であるから，若し僕が□□□□□□□□□□□［〔欄外に記す〕譬へ外形的な］自然に対して，兎も角も興味があるとしても，定規的プロポーションと定規的見方に於ける線と面とによる肉づけ，あらゆる定規的手法に依る定規的正確からは，決して僕らしいものは産れないのである。

まして僕の意志を，僕の感情を，僕の感覚を，僕の趣味を，あらゆる僕の内的衝動を，僕の性情を露骨に盛り出すには，粗（〔素〕）朴的実在論的な外形では全く不完全なのだ。

そうして他面，僕は技巧（技術と云った方がいいだらう）至上主義的芸術至上観を持ちあはせないのだから，以て［〔欄外に記す〕いよ〳〵僕らしくならざるを得ないといふものだ］，僕が目下の帝展に対する立場を察し給へ。

久功

築地のマチネーは，ショウの一幕物二つ，「ヴィクトリア勲章のオフレアティ」[105] と「馬盗坊」[106] だった。ヴィクトリア勲章のオフレアティの方は，台詞と台詞の内容とがあまりにショウ式にジグザクに充たされて居るので，一寸忙し過ぎる。つまり台詞の内容が一々観客の頭の中で，順序よく整頓されてゆく程にテンポをおそくしたならば，それはそれだけの対話としては，相当な興味がつなげるにしても，芝居としてのヒューモアは全く死んで了はなければならないだらう。そして反対に，ヒューモアを先にする為に，台詞の内容を観客に言葉通り，逐次的に合点させてゆく事からはなれて，唯々劇の「運び」をわからせるだけの程度を保って，思ひきってテンポを速くするにしても，今度は「運び」だけには必要以上に台詞が多過ぎるか，或ひは六ヶし過ぎる為に，観客はチェェホフの喜劇を見るようなあんばいに，気楽にはゆかないだらう。だが実際的には，当然後者を撰ぶべきである。これだけの難があるにも拘らず，そして実際厳密に云へば，そうした傾向があったにも拘らず，此の芝居は面白かった。茲では演出者土方のお手柄とす

べきだ。演出者は,□□□(後者を)勿論後者を撰んだ上に,思ひきってヒューモアをツッ走らせた。そして役者は全然カリカチュアになった。役者もなか〳〵うまかった。オフレアティの楠田清氏は,今度はじめてこんな役を貰った人で,多少の役まけがないでもなかったが,全体を駄目にする程な□□(失敗)大きな欠陥ではない。くりかへして云ふが,茲では演出者が一番働いて居る。

「馬盗坊」は,ショウ自身が,「一つの説教」と云って居るように,全く説教だ。「馬盗坊」だけではない。ショウのものはみんな説教に近いが,これは又純然たる説教だ。だが又それ故に,演劇的効果が低いかと云ふに,そうも云へない。此の説教は極めて技巧的なメロドラマの着物を着て居るのだ。だが又ショウが特にこれは「説教」だと云ふだけあって,中心価値は,より多く「説教」の中にある。ボスネットの,何でもないしゃれと何でもなくないしゃれは,極めて露骨な現代的な清教徒的詭弁であり,そうして決して何でもなくない所の,何かである所の詭弁である。難を云へば,戯曲と説教とが全く同居して居ないで,戯曲と説教とが各独立して,交る〳〵ちゃんぽんに出て来るような傾向があるので,演劇的効果が時々中ぎれする如き感がある。だが又,これだけの詭弁は,而も何等かである所の詭弁は,ショウをまつに十分価するものであらう。ボスネットの丸山君,なか〳〵うまい。エヴンス高橋さんがもっとうまかったら,幕切れはもっとよくなっただらう。岸さんの今日の二役は,此の前の「朝から夜中まで」の頃から思ふと,別人のようにしっかりして来た。

二十二日

晴。夕方から曇り,晩,ぱらぱら雨。

○作品の価値に就いて

一つの詩の価値は,偶然的相対的であって,決して普遍妥当でない。一つの詩の絶対価値は,誠に客観的実在としての白紙一片の絶対価値である。□□□□□□□□□□□□(白紙一片の物質的価値は常に)□□□此の客観的実在の絶対価値は,誠に唯絶対価値であって,如何なる価値基準にも順応しない所の,云はば「無」に対する「有」の絶対価値である。白紙一片の物質的価値は,常に明らかに白紙一片の物質的価値であって,常に相当の基準の物質的価値によって置き換へられ得る。けれども,此の一片の白紙の精神的価値(厳密に云へば,対精神的なる効果とか,或る精神的なるものを誘導する所の中介(〔仲〕)としての価値)は或る時間の内に,或る状態の下に,或る主観によってのみ感じられ,或は産み出だされるのみであって,全然偶然的,相対的である。

処で,現在行はれて居る芸術に対する価値概念は,誠に中ぶらりん(〔宙〕)なものであって,それは例へば彫刻に於けるブロンズの物質的価値でもなければ,絶対精神的価値,〔絶対個人的価値〕(〔欄外に記す〕)――無価値の価値でもない。私は主張する。或る作品は特殊な人に対して

特殊な価値を持ち，他の人に対して他の価値を持ち，其他の人々に対して紙屑にも価しない。唯それだけである。

二十三日

○詩史

詩史を繙いて見ようか。各時代時代に，一般に詩らしい詩と思はれた所の詩の内容であり，或は上皮である所の要素（概念）は，誠にたわいなく変遷して居るようである。或る時代には，詩の最も詩らしい要素とされたのは涙だった。次の時代には，ロマンスであった。次には，真実であった。次には力――ヴァイタル・フォースであった。情緒の繊細，信仰の敬虔，諧調の優美であった。貴族的閑人的遊戯であった。革命的理想であった。民本主義的精神であった。倫理的人道的熱情であった。技巧そのものであった。さて，象徴であり，難渋不解であり，怪奇であり，ダイナミズムであり，明るさであり，暗さであった。さて，そうして目下に於ては，「感覚」が一大勢力を以て君臨して居るかに見える。誠にたわいのない流行の如くに変って来たようだ。

さて，詩とはそんなに色んなものなのか。それでは詩の本質は何か？　一体何が詩の本質なのか？　それらの外皮の中に盛られたる内容，それらの内容の中に自ら（おのづか）に備はる，より深い内容――「詩」を措いて詩の本質は無い。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

○作品C

主観aと絶対客観（題材或は主題其物）　bとの非数学的和から作品cが産れるとする。今茲にcとされた作品は，本体論的な客観的な作品其物であって，主観aが作品cに対する認識は，c’である。今仮りに主観aが不動不変であるとするならば，（そして主観aがcの表現に満足して居るならば――云ひかへれば，cの表現が完全であるならば）主観aに対してはc’はcに等しい。けれども，全然他の主観X，Yに対しては，cは既に因果律的には行かないのであって，それぞれc”，c’”として認識されなければならない。

それほどcの意義は不安定である。

然し我々人間の経験範囲は，先づあまりに突飛に飛躍されないから，c’，c”，c’”の間の差異は，次の作品dに対する認識d’, d”, d’”等と其等との差異のようなことは先づない。其上，我々の或る芸術に対する準備は単なる経験以上に，或る概念伝統によって更に其等の範囲を，或る基準内に抑制されて居るに於てをやである。

先づ安神〔ママ〕である。

然るに此の安心は，唯に我々のそれぞれの認識の間の差異の比較的には小さいといふ事実であるだけであって，それらの認識が我々の内面的主観に及ぼす効果に到ると，この小さかるべき差異は，感情といふ色眼鏡によって殆ど統御せらるべき範囲を越えて，

無際限に拡大されてしまふのである。即ちｃに対して,「俺は大好きだ」と「俺は大嫌ひだ」との，全く正反対の二つに分れることはザラにある事実なのである。

それ程相異った主観に対するｃの効果は，不安定である。

○作品ｃの価値と観賞

斯くの如く，相異った主観に対する作品ｃの効果は不安定である。然らば此の効果から推定されるｃの価値も亦，当然不安定な筈である。

然るに，古来，現在芸術の価値基準は，多少の異説はあるが，大体に於て定められて居る。然らば何によってそれが定められるかといふに，一言にして言へば，伝統的な約束によってである。即ち或る仮想されたる目的に対する表現的完全，或は或る予想されたる完全其自体に対する完全さの度合によって定められるのである。そして此の（現在に於ては殊に）予想される目的其自体及び仮定される完全其自体の差異に従って，価値の基準に幾通りかの差異を生じ，そして実際的には観賞は，これらの基準の一々の測定の総和――多分に直感的（第一印象的とは全然別だ）な「感じ」によってなされて居るのである。

○「完全」の分裂

近代以前に於ては，種々の理由から，此の予想される完全乃至予想される目的は――勿論時代的には変遷して来たとは云へ――一時代に於ては，先づ一つの傾向の中にあって，先づ大同小異であった。茲に顕著なる例をあげるならば，エジプト時代に於ては□□□□の代表的芸術，絵画彫刻に於ては，神話的起原の如き無意識的伝統――所謂エジプト式形式の中に根強い迷信を織り込んだ。誰でもエジプトの美術を少しく見るならば，其処に明らかに「エジプト式」を感ずるであらう。ギリシャに於ける肉体的理想は，又明らかにギリシャ式彫刻となって現はれて居る。

ルネッサンス時代には，衆知の宗教画が時代的潮流として唯一的に栄えた。そして同じ宗教的なものでも，其の前時代のゴチックでは，ルネッサンスとは又全然面目を異にして，神秘的な分子を多分に含んで，是亦明らかな一傾向を残して居る。バロックは又，宗教からはなれて主題を宮廷上流社会にとり，彼の厳めしい併し豪勢な画風に依り，ロココは又明らかにコケティッシュな趣味によって，特殊な置位を持って居る。そうして其々の時代に於て，其々の傾向趣味技巧が，芸術の至上的な置位を持したのである。

其の理由としては，個人的自覚がなかった事を第一に上げ得るのだが，其の結果，時代的潮流の前には，個人は殆ど盲目だったのである。（そのようにして「一つの完全」に対してなされる努力にも拘らず，各個人の作品には，自らなる差があった事を，私が後に書かうとする事の為に特に注意して置く）。然るに近時に至って，個人的自覚の抬頭によって，譬へ総括的には其れをしも，時代潮流と云はれるとしても，而して誠にそ

れらの総てのものの中に，多少とも［或は多分〔欄外に記す〕にさへ］時代的風潮を認め得るにしても，各個人は，在来の如く盲目的でなく，寧ろその越ゆべからざる総体の中に於て，積極的に自己――個人としての自己の所信を主張せんとするに至った。近代以前に於ては，「完全」は歴史的に推移した。近代に至って「完全」は，一時代の中に於て分裂した。

かくて，作品ｃの価値は，時代時代の一時的基準を離れて価値の本然に帰り，価値は各人の個人的創造としてのみ意味づけられる筈である。

――――――――――――――――――――

終日雨が降ったり止んだりして，其上風さへつのって，心細く冬の来る景色である。

□□××様
✓すこやかにお過ごしなされ候や　□□□〔冬〕み冬の雨の寒う来るなべ
✓久しきに音しも無くば雲がくり身がくりますとわがなげかなむぞ

二十四日
（詩集の序の一ツとして）

いつの頃からか，私は一つの物を見る時，必ずそこにあるもう一つの物を見ないでは居なかった。それが其の物のたわいもない幽霊であるのか，或はそれが外面的な物以上の，より深い物其自体であるのか，私にはわからない。

若しも前者であるならば，私の目は病んで霞んだのだらう。恐らく私は常人以下の不具者なのだらう。若しも後者であるならば，私はミューズから魔法の眼鏡を授かった，恵まれた常人以上の詩人なのだらう。だが私にはわからない。

若しも前者であるならば，恐らくは完全な人間の少ない世の中に，恐らくは私と同じ運命を託つ世の不具者達よ，茲にも一人の不具者が泣いて居るのを見て憐んで下さい。そしてあなた方自らをも慰めて下さい。若しも後者であるならば，多くの世の常人達よ，ミューズの申子にのみ許されたる，君等が不幸にして「見得ざる物」を見よ。君等が不幸にして「聞き得ざる声」を聞くがいい。エヘンプイ

だが私にはわからない。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

○自由と束縛と――形式に就いて

あまりの自由の中に居て，人間の欲望は際限もなく突飛な飛躍をする。鳥のように空に翔り，魚にも劣らず水にひそみ，獣のように白中〔昼カ〕恋せんとする。そこで昔偉い人が出て，極端な束縛を造り，そうしてそこに正当な理由を見出し，そうしてそこに自らその報酬を得た。淫を禁じ，食を控へ，肉を裂き，欲望を断って，おゝ，そうして心の自在を得た。

単純の中に〔複〕復雑を統御し，一瞬の中に久遠を籠め，有限の中に無限を畳み，無の中に一切有を納めた。

詩歌に於ける既成形式は，云はば此の束縛である。その起原も，その理由も，その便利も，その価値も，そうしてその効果とその報酬とも，総べて此のうちにある。あまつさへ絶対自由の中に，無際限の対称の中に目眩み，目的を失ひ，道を迷うた人間の反動的感情は，此の自縛の中に興味（殊に技巧的）をさへ見出し，安心をさへ得たのである。けれども，人間の本然的欲望は，此の小さな安心の中に絶対に安心しては居ない。此の限定された興味の中に，悠久な興味を持ち続けることは出来ない。そこで，一寸した破格を喜び，もっと大きな破格を面白がり，形式無視を主張し，絶対自由を叫び出すであらう。

どっちに理由があるのか？　多分これはあっちと，こっちと循環的にお互に理由を持ち合ふべきであらう。

二十五日

晴，午後，曇って寒くなる。

◎（個人展覧会の為の前口上）

私は彫刻家になるつもりで美術学校に入ったのですが，美術学校を卒業する前に，彫刻の大家になって取りすますような気は毛頭無くなって了ったのです。それから後は，惰性でぐづ〳〵して居るうちに，美術学校を卒業してしまったのですが，今になっても，美術学校は私に何を教へてくれたのか，何うもしっくりしないのです。いいや，多分色々な技術を教へてくれたのでせう。兎も角も，何も出来なかった私が，何かかにかこしらへるようになったのですから。

それにしても私が今造って居るようなものは，何も五年間も美術学校に通はなくても，誰にでも出来るようなものです。全く私は大変な遠道を歩いたものです。いいや，この五年間が私に所謂玄人芸術を嫌ひにさせたのだと思へば，譬へ其の間が余りに長過ぎたにしても，自らの迂闊さを笑ふ外，腹もたちません。私は素人の余技が好きです。尤も所謂素人でも，解ったような玄人ぶった素人は，玄人より鼻持ちがなりませんがね。何故だか，一寸お話しします。

まあ，帝展に出て居る人達は代表的な玄人でせう。処が皆さん，帝展に行ってごらんなさい。其処にあなた方は何を見ますか？　其処にあるのは，デッサンの正確，刀の冴え，仕上げの丁寧，技巧，技巧，技巧，外面，外面，外面です。素人の造るものは，そこへゆくとがさつで，きたならしいです。にも拘らず，素人の人の作品には，なか〳〵面白

いものがあります。何故でせう。私はそれを其の製作動機に帰し度いと思ふのです。これらは全然余技ですから，始めから楽な気持で誰憚る所なく（或は知らない故に）勝手なことをやらかします。

ですが，その勝手さが結〔局〕極自己に忠実である所以なのです。［〔欄外に記す〕人様の前に取りすましたり，取りつくろったりしない無邪気さが，其処にあるのです。］素人は，内容を持たない時には製作しません。素人は，衝動を持たない時に製作しません。そんな時，素人は寝ころんで，新聞でも読んで居ます。素人は［〔欄外に記す〕所謂］帝展作家のような，美に対する特殊な智識（悪いことにはこいつが得て空虚な概念に陥り易いのですが）を持ちません。素人は帝展作家のような特殊な技巧（悪いことには，こいつがなか〳〵の出しゃばり屋なのですが）を持ち合はせません。そのかはり，素人は臨〔機〕期応変といふやつをやります。そうして此の特殊な技巧を持たないといふ事が，特殊な技巧の興味にとらはれないといふことが，内容を傷けたり，いぢめつけたり，忘れたりさせないで，却て内容の露骨な表現となり，技巧を二義三義的なものとして，いっこう平気で居るのです。玄人は云ふでせう。技巧がなくては微妙なる芸術的表現は不可能であると。ですが，私は技巧ならば「窮すれば通ず」といふ位ひの所で結構だと思ひます。何故といって，再び帝展に行ってごらんなさい。微妙？なものを表現すべき為の技巧がのさばり出て，のさばり出て，完成，完成，完成といふ味も塩けもない，内容を置きわすれた外形の，芸術をふりおとして来た技術の競争です。こんな技術の競争となると，木や石膏では何んなに花々しくしても，神宮競技の明るさ，生々しさにはかなひません。

内容と技巧とは一心同体であって，しかく別々なものではないと玄人は云ひます。ですが，これはそこに内容（文学的意味ではなくて，云はば抽象的実在として予想される所の「詩」□□□其自体です）があって，技巧が得意げに，空虚な技術そのものとなって，のさばり出て居ない状態でなくてはならない筈です。

［〔欄外に記す〕「ギリシヤ末期からローマへかけての時代，十九世紀末から二十世紀の始めにかけての，イズムの競争時代□□□□□□□□内容の必然的な発露でなくて，スタイルの為のスタイルの乱産時代などは，芸術史上，技巧至上主義的芸術至上主義の最も盛な時でしたが，ひるがへって思ふに，此等技巧至上主義的芸術至上主義の盛な時代程，芸術は概念的な特殊範囲内に限定されて，その本然な自由さを失って居ます。」］［〔線で抹消〕ほんの一寸芸術史をのぞいて□□□□覗いてごらんなさい。技巧至上主義的芸術至上主義が跋扈して居るのは，芸術の爛熟廃頽期に於てだけです。ギリシヤ末期からローマへかけての時代，十九世紀末から二十世紀の始めにかけての，イズムの競争時代などはその最たるものですが，［〔欄外に記す〕（欧州に於てもその余塵は猶ひろく跡をとどめて居ますが，若しも帝展の彫刻を以て日本の現在の彫刻界を代表させるならば，日本の彫刻界は一時代遅れて今や華々しくこびに行く所と云った所です。）］

［〔欄外に記す〕処で，］私はもっと厳密な意味で――といふより，もっと本然的な意味で，某派，某

式と云はれた処の一切の，あまりにとりすました玄人芸術を非難するものです。何故と云って，それらは又各その派の中に縛られ，其の式の中にくびれて――つまりは，それぞれの特殊な美の硬化した概念乃至は化石したような審美的約束の中に，自ら縛られて居るからです。

ですが，美術が或る王侯の鼻息に支配され，或は審査基準を立てないでは居られない社会に順応して居る間は，当然これらの状態からぬけきる筈がないのです。

ですから，私の云ふような素人の楽な気持と絶対の自由を持って居るのは，玄人のなかった古代人と玄人のない未開人と，そうして世間風に歩かない所の芸術の小〔少〕数の無信仰者（ダダイストのような芸術破壊者乃至否定者ではなくて，芸術の絶対基準乃至価値を信じないで，只に純真にして暖かい興味を持って居る所の）だけです。

そこに基準がないならば，興味の内容は低下し，芸術は堕落するだらうと玄人は云ひ度いでせう。処が私が価値基準を否定するのは，価値はおのづからなるものであって，特殊な基準概念によって限定さるべきものではないといふのです。総理大臣である故に必ずしも偉くないとか，人間の品性はその人の言動の社会的道徳的結果からのみ推測さるべきではないとか云ふような，七ッかたい意味ではなくて，気まぐれな冗談の中にも，□□（自ら）おのづから人格の深浅が反映し，むき出しの行為の中にも，おのづから態度の純否は覗き出るような事実を信頼するのです。（斯くて興味は上下の価値基準から離れて，其自体で□□（自ら）おのづからなる深浅を蔵して居るのです）

私の彫刻はしかく，よそゆきではありません，日常の其時々の気まぐれな，気楽な私なのです。其故見て下さる方々も，変な既成概念を暫らく忘れて，空っぽの心で見て下さるといいと思ひます。私の展覧会場では目を細くしたり，首をひねったり，こわい顔してにらみつけたり，ためいきをついて下さったりするような親切気は禁物です。どうぞ親しいお友達と，笑ったり喋ったりしながら，気楽に見て下さい。

口上が馬鹿げて長くなって了ひました。では幕をあけますから――

夜遅くなって雨。

二十六日

○何といふ名前だっけ
モデル台に上ってぽつぽつと
一人言のように身の上を訴へる娘だった
×
○お宮って云ふ女だった
俺を酔はせて酔はせて

死んだような俺からキスを盗んで笑ひやがった

×

○薄暗い小さな室の隅でした

「どうかなさって？　お召がぬげましたら，此の台の上に……」

十七の子供だった私，看護婦が怖かったのです

×

○白い看護婦が私を呼んだ

「今度の日曜にお集りにいらっしゃる？」

どこかで雲雀がちいちく鳴いてゐた

×

○鉄瓶がしいんと鳴ってゐる

隣の室から人の寝息がかすかに聞える

あゝ，私も試験勉強をしたことがあった

×

○仰向になったキヨ坊の胸の上に

海水着の下からお皿のようなお乳が二つふくらんでゐた

私が海水でかためた砂のおだんごをぶつけてやったら

キヨ坊が泣き出しそうな顔して向ふをむいてしまった

私，自分のじょうだんを時々ふりかへっていやな気がする

×

○「〔蜜〕密蜂のそんなにも周到な技巧と順序とが只只生殖の本能だとしたら……？」

それを僕に聞いて何うしようとでも云ふのですか

フランスに行って亡くなったファブルさんにでも聞いて見給へ

×

○おゝ，太陽

明るい——

最初に笑った故に最後まで笑ふものよ

×

○太陽，すばらしい唯一のお前ではあるが

美しい詩の霧をがさつに追ひやるお前は

所詮あまりにむき出しな現実の王である

二十七日

（詩集の序の一つ）

私の詩は何時だって「ヘッ!」だ

私は真面目になって考へる
考へは進行する
わき目もふらず進行する

長ったらしい詩が書ける
さて私の詩は何時だって「ヘッ!」だ
私は他人の詩も此の「ヘッ!」で片づけ度い

私は「ヘッ!」で片づけられる詩が好きだ
此の「ヘッ!」の中に千萬無量のものがあるようだ
「ヘッ!」の中にだ

諸君，若しも諸君に親切気があるなら
七ッかたい既成概念を去って
私のどの詩でも此の「ヘッ!」でやっつけてくれ給へ

ヘッ，ヘッ

二十八日　日曜日

午後，日本青年会館に岩村〔和雄〕の踊を見にゆく。帰り，村野四郎君の所に「碌人碌語」の集りに出る。集るもの，近藤益雄，都築益世，俠野英夫，山崎泰雄，今岡弘，能村潔，倉橋弥一。

遅く十二時過ぎて帰る。夜がこごえるように寒い。

二十九日

夜，まり子，るり子[107]が宿りに来る。

三十日

夜，小石川へ行って帰って来たら，駅で中井の良さんに逢ふ。私達の処に出てくれたのだそうで，二人でカフェーで十一時頃まで話して別れる。

十二月

一日

終日雨。

二日

晴。夜築地に行く。マルセル・マルチネの「夜」[108]。

三日

午後，三角が来てくれる。夕方，目黒から電報で，文ちゃんが悪いからすぐ兄に来るように言って来る。が兄は八時まで待っても帰らないので，自分が行ってくる。十二時に帰って来たら，中井の良サンが来て居た。皆で話して居たら，一時に兄がマコトサンをつれて帰って来る。

五日　日曜日

夜，本田サンが来て下さったが，兄が居ないので，私の処で十一時まで話して居た。

六日

曇って居たので，昼間は寒かったが，曇って居るので，夜は割合に暖かい。

七日

昼前に川路氏を尋ねたが，留守だったので，原稿だけ置いて，室田のきみちゃんの所を尋ねる。夜雨。風雷烈し。

○（芸術と社会と芸術の価値と）

芸術家は時代的生活意識の上に立脚しなければならない，芸術家は社会の先頭に立たねばならない，芸術は来るべき時代を指示し，誘導すべき……とは繰返し云はれたことである。芸術家よ！ 社会の先頭に立つ――などと云はれて得意になったならば，あまりにお人よしと云ふものだぞ。何故なら，芸術家は只単に少しばかり，より非社会的であることが出来るといふ伝統の為にのみ――（敢へて伝統といふ，何故ならそれは芸術家の本然，絶対に赤裸々なる人間であるべき芸術家とし〔て脱カ〕ではなくて，只単に少しばかり非社会的なる社会人としての芸術家に奉られたる最も□□□□□□□□□□耻辱なる或は最も名誉なる，或は最も耻辱なる伝統なのである）――一般社会人のうちの特殊な人々が考へながら□□□□□，〔欄外に記す〕［社会的拘束の為に］実行出来ないで居ることを，社会的でない〔ママ〕法方で，そして社会的

でない法方〔ママ〕である故に，おくめんもなくやって居るに過ぎないのだ。芸術が来るべき時代を指示すると云はれるのも，只単に此の事実があるからなのである。あたり前過ぎるあたり前なのだ。そして其れすらも芸術それ自体の意義を外れて，社会的意義に於てなのである。

芸術の中にしかく社会的普偏〔遍〕的価値を主張せんとする所に，根本的な間違ひがひそんで居る。芸術はその本然に於てしかく社会的に価値あるものではない。何故なら，社会的進歩と人間的進歩とは，しかく並行するものではないのである。そして社会的価値乃至権力は，何と云っても，彼の人間其物とは無関係に，或は無関係的に進展して行く所の政治的事実が，永久に握りしめて居るのだ。これは社会の成立と同時に始まった約束なのである。何故と云って，仮りに華々しい文化が始まって，ここに二千年が立つのに，人間的要求は常に社会乃至社会政治に訴へられながら，常に社会から阻まれ，或は常に或る程度内に抑制されて来た事実を，誰が否定出来るか。そうして此の文化を持たなかった古々代人は，人間的要求を必要としなかった程，しかく人間的本然の状態にあったのであらう。社会は社会それ自らの必要によって成立ち，それ自らの必要によって進歩して来たとは云へ，社会は又人間それ自体乃至は個人としての人間とは，永劫に全的には相ひ入れない約束を，その当初に於て約束したのである。そうして芸術それ自体に価値があるとすれば，それは個人的な価値であってのみ意義あるものであって，芸術が赤裸々な人間的要求であればある程，芸術を社会的価値と関連させることは，芸術それ自体を否定して行く事なのである。

芸術には進歩は無い！　芸術は其の感情的範囲と技巧的範囲とを益々広めて行くだけであって――これをもこそ進歩と云ふならば，一歩を譲って芸術には価値の向上はない！

芸術価値は絶対に個人的なものである故に，そこには一般的進歩は決して有り得ないのである。

人間が，しかく社会に新らしき要求を提出しては，社会の進展に関与して来た事実が，依って有る理由こそ人間が社会と共に進歩して行くからだといふ人があるか？　処でそれは外□□□□□面的には社会の復雑〔複〕に比例して，要求乃至運動も，その理由も，その意味も亦，復雑〔複〕になるであらうが，人間本然の感情的には，只々束縛に対する反抗意識なのである。

芸術はしかく社会的なものではない。

芸術はしかくよそゆきなものではない。

芸術はしかく限定的なものではない。

芸術はしかく普偏〔遍〕妥当なるものではない。

否，普偏〔遍〕妥当の観念に支配され，或ひは普偏〔遍〕妥当なる意義と価値とを主張すべきものではない。それはとりもなほさず，赤裸々なる人間であるべき芸術家を，社会人の規矩に限定するのみである。社会は勿論，人間を以て組織せられるものである故に，社会は

全的に人間――個人と乖離するものではない。即ち，われ〳〵は，社会人として社会的便利を知り，社会的愉楽をも味はって居る。而も，社会的なるものが，人間の全部ではないのである。そうして芸術は，社会が要求するものではなくて，人間が要求するものなのである。

芸術至上主義は，芸術の社会化から産れる。社会的支配の下にある，最も非社会的なるものとしての名誉であり，或は恥辱なのである。芸術の破壊乃至否定は，芸術の社会化から産れる。社会的支配の下にある最も非社会的なるものとして，当然受けねばならない刑罰である。前者は，社会人の衷なる人間の手淫的自慰自安であり，後者は社会人としての勇敢なる自覚が勇敢に人間――個人の抬頭を否定するのである。

芸術の社会的意義と価値とは，芸術それ自体の存在意義と価値とからは全然別個のものである。芸術の社会的意味は，芸術の非時代性を時代的に限定し，芸術の社会的［一般的〔欄外に記す〕］価値は芸術の個人的価値――云ひかへれば，芸術の超価値□□□□□□（或ひは無価値）を特殊基準――（極めて一時代的偶然的なる）――内に限定するのである。

そこで，結論に急げば斯うである。芸術が来るべき時代を指示し，芸術が，人間的要求の決して絶えることのない「社会」の先駆者であり，或は，しか見えることは単なる事実であって，社会的乃至時代的特殊性或は反響，予示等を以て芸術を基準的に限定し，芸術家を評価し，或は定義づけるに至っては，正に主客顛倒である。芸術には時代はない！　即ち芸術的主題，或ひは衝動の対称〔ママ〕が外界――周囲に見出される故に，［云ひかへ〔欄外に記す〕れば我々は常に周囲の中に居り，周囲の影響を直接，間接に受けて居る故に，我々から産れる芸術は］，芸術は自ら時代的反影〔ママ〕を持ち，又時代的社会的興味と関連することは事実であると共に，それは必要でもなければ規定でもないのである。そうして芸術の時代的社会的なるものとの関連から，芸術内容の思想化，科学化，抽象化等等等が開けるにしても，技巧の統一的様式化，観念的絶対化（芸術至上主義的）等等が見出されるにしても，それらは芸術の範囲の，分野の拡大を越えて，芸術の価値の向上でもなければ，絶対化或は普偏〔遍〕化でもないのである。

扨て，われ〳〵は斯うした結論に到達すべき実例を何処にでも見て来たのだ。而も又，社会的伝統は人間を，否，人間的自覚を麻痺させ，社会的権力は人間的個人的内省を阻止して来た。

ゴーギャンは，社会的芸術基準の重荷に肩をこらして叫んだ。「画家は自由でなければ画家ではない！」「美しい作品を作る秘訣があるのでせうって？　その答へなら何度も繰返した。私は気まぐれものだ！」そして，タヒチの「人間」の中に逃げて行った。それだのに，しぶとい社会は彼の死後に至って，彼の魅力を完全に社会的価値基準の中におしこめてしまったのだ。

カンディンスキーを見るがいい。彼の中なる人間は，遮二無二彼を気まぐれの中に追ひ立てた。然るに彼の中なる社会人的教養は，伝統的惰性乃至麻痺的迷妄から彼を救は

なかったばかりか，益々彼をヅに乗らせたから，彼はとんでもない芸術至上主義者になりすましてしまったのである。そして彼の衷なる人間的気まぐれと，彼の芸術至上主義的精神主義とが相結んで，遂に彼のあの出鱈目にまで到達したのである。

ピカソはいみじくも云った。「過度の芸術といふものは存在しない！」これは一切を説明する言葉である。

然るに如何に社会は，しぶとくして高圧的であることよ！

而も人間は如何に絶対に人間的であるべく，反抗的であることよ！

人間よ，芸術家よ，社会に反抗して思ふさま気まぐれであれ！

人間よ，芸術家よ，一切の芸術価値基準を返上して，芸術の芸術たる所以を徹底せしめよ！

八日

晴，風烈しく，寒気酷し

九日

晴，今日も又風だって，寒い。ひどく寒い。

十日

晴。風は吹くが，一昨日，昨日に比べては，幾分暖かい。

十三日

十一日に鎌倉に行って，今日帰って来る。今日は，朝から曇って晴々しない。

✓小高くてあすこの畑の青さかな
✓日を浴びて日を浴びて惜しき冬田かな
✓桐の木に烏来て一羽とまりけり冬の日の窓

〔松村磯子〕
イソチャン

私の本の中で今次の一くさりを読んだ所です――新らしい一万人は常に新らしい工場に集り，群らねばならないにも拘らず，精神的範囲に於ける主観主義は，もう一度ニイチェの教理，即ち超人の説によって勝利を祝福された。ニイチェの影響のもとに，十九世紀の非常にたくさんの詩人達が立ち上った。社会主義の萌芽を，心と頭とに持って居た今迄の民衆階級の理解に就いては，一言の説明も与へられなかった！――

処で，大分御無沙汰ですな。若い人といふものは，時々老人に敬意を表するものですよ。だからと云って私は又，あなたがほんの暫らくお便りを下さらなかった事に対して，少しでも不平を云はうとするのではないのです。何故と云って，あなた方は毎日学校に行って，沢山のお友達と沢山のお話をしたり，沢山の楽しみをわけあったりして居るのですからね。え？　学校なんかちっとも面白かないって？　そんなませた口をきくものではありませんよ。

処でお変りはありませんね。それならば，何よりも結構。扨て私の方は，毎日の寒さをのけたら，まあ別段の不平もないような次第で，二三日鎌倉に行って，さっき帰って来た所です。それから，私のテンランカイは，段々に延ばさなければならないような事になって，丸善の新らしいギャレリーが，来春一月末でないと出来ないので，そして一月ではあんまり寒過ぎますので，そして私はそれでも，私のテンランカイは何が何でも丸善でやらうと決心したので――何故かって？　何故と云って，多分私の自尊心が強過ぎるか，或は多分私は一般社会人――民衆を信用しないからでせうよ。そんな訳で，私のテンランカイは多分四月になるでせう。

四月と云へば桜の花が咲く頃です。まだ〳〵ながいことです。そうしてあなた方は学校を卒業して，お花のお稽古かお茶のお稽古，でなければ，女学生気質のカラを脱いで，女学校卒業のサイエンとして大きな髪でも結って――いいえ，私はそれに対しても，別段の不平はないので，何故と云って，それは又立派に次に来ることの次に来るものの必然の過程なのですから。それはそれ，私のテンランカイの時には，お知らせする事を忘れないでせうから，御家族，御友人お誘ひの上，賑々しく御光〔ママ〕覧，御批評，御悪口，御買上の栄を頂き度いものと今からお願ひする次第。処で何処かで鬼めが笑って居るようですから，来年の事は来年として

銀座を歩き度い！　どうも田舎に居ると，それも毎日〳〵家にばかり居ると，銀座の人ごみの中を口でもあいて歩いて見度くなるものですよ。どうです，日曜日にでも，昼日中，銀座通をあっちからこっちへ，こっちからあっちへ，三四時間もぶら〳〵歩いてみる気まぐれをお持ちあはせはありませんか？　それとも，試験，試験，試験ですか？

扨て，あまり長い手紙といふものはいいものではないかも知れませんから，このへんでやめ。

ではさようなら

病気になるような親不孝を決してしないように！

高円寺老

十四日

雨。夕方前晴れて，夕日が黄色い。

十五日

雪雨。

十六日

晴，午後曇。午後，遠山さんをお訪ねし，小城さんに一寸よって，夕方帰る。